

『咳餘叢考』 訓譯卷十三之下

今回は、第十三卷の後半部分を登載させて頂く事となった。水先案内人たる筆者の退職を二年後に控え、茲に些か過去の経緯を述べさせて頂く。

この『咳餘叢考』の訓譯を公開し出した理由は、既に卷一之上を公開した平成十年三月の本誌第三十七號の序文に詳説してあるが、それから早二十年の歳月が流れ、やっと卷十三之下に辿り着いた、と謂うのが偽らざる実感である。眞に牛歩の如き遅々たる歩みではあるが、その間に幾多の若い學徒が本作業に参加され、營々と受け繼がれて今日に至っている事を思へば、歩みの遅さを決して恥とはしない。然りと雖も、「では内容は」と問われれば、寔に忸怩たる思い

田	佐	栗	小	大	今	中
中	藤	栖	澤	兼	關	林
良		亞	さ	健	雄	史
明	良	矢	やか	寬	史	朗
		子	か			

が無いとは言い切れない。その責は一に筆者の能力に起因すると言えるのである。

また『該餘叢考』の訓讀と謂う作業は、平成十年に始まるものではなく、それより遙か以前、昭和五十年四月から開始されたものである。思い起こせば昭和四十五年から、故原田博士を初めとして多くの先生方が讀書會を開いておられた。當時、中國文學科では、學生の漢文讀解力養成の爲に、授業外での有志に因る讀書會が多く行われていた。その一つが故原田博士主宰の『該餘叢考』訓讀であった。

筆者は、故原田博士指導の下、卷十を讀了した昭和五十三年三月を以て、他大學に奉職した爲、十年程本作業から離れていたが、縁有つて本學に奉職した昭和六十三年に、故原田博士から「私に代つて残りを續けよ」との命を受けた。身の程を辯えぬ己が能力を越えた作業ではあったが、「君命悶し難し」の感有つて受け継ぎ、以後若い學徒達の努力に支えられての今日であり、本作業は、將に中國文學科の良き傳統の一つである讀書會の成果の一端なのである。

因つて、當然の事として二年後には然る可き研究者に、水先案内人たる役目を引き継ぎし、學科傳統の營爲として本作業の完遂を圖つて頂く豫定である。

今將垂従心、故欲述吾意於後進矣。先師雖知我愚才菲力、而寄我以該餘也。以來懼傷先師學恩之明、以思日孜孜、爾來三十年矣。今雖人員不足、後進已育、以宣傳後代也。嗚呼大東漢學、其傳兮、其託兮。

尙、この卷十三の下を擔當された諸士は、今關雄史（現、東京教育文化學院）・大兼健寛（現、たちばな學園講師）・小澤さやか（舊姓三島。現、たちばな學園講師）・栗栖亞矢子（元、大東文化大學大學院）・佐藤良（現、埼玉縣立上尾高等學校教諭）・田中良明（現、大東文化大學東洋研究所講師）の六人（五十音順）である。

【原文】

9 宋史一

宋史卷帙最繁其中實有可不必立傳而拉雜列入者如侯益張從恩扈彥珂藥元福趙昂李穀竇貞固李濤趙上交張錫張鑄邊歸謙劉濤等皆歷仕五代宋初不過仍其舊官毫無功績何必一一列之其意以爲五代史既不載不得不於宋史存之也然如李穀李濤等在五代尙有事蹟可記其餘本不足書乃一概入之列傳仍不過敘其歷官如今仕途之履歷而已此亦成何史冊乎況薛懷讓等并未仕於宋而入之宋史乎又如王祐傳既敘其拒盧多遜傾害趙普之謀又以百口保符彥卿無罪及手植三槐卜其後必昌等事則其子王旦傳不必複敘矣而且傳又縷縷述之神宗時新法行盡斥賣坊渡祠廟張方平爲南京留守管內有闕伯微子廟亦在所賣中方平使劉摯草奏謂闕伯遷商邱主大火火爲國家盛德所憑微子宋始封之君本朝開國建號於此乞存其祀神宗驚駭亟批紙尾謂慢神辱國莫大於此此事既載之方平傳則劉摯傳可只用一二語括之乃又一一詳敘何也李定以秀州判官薦授御史宋敏求蘇頌李大臨皆力爭之則詳載其事於一人傳中其餘各傳但云語在某人傳足矣乃既詳載於頌傳而大臨傳又詳之石介之死也夏竦挾宿憾誣以爲不死北走契丹奏遣中使按驗呂居簡傳則云中使來按甚急居簡曰發棺而空則北走無疑不然則國家無故剖人家墓何以爲訓中使曰然則奈何居簡曰介死必有會葬之親族及棺斂之人召問無異可卽令具軍狀以應中使然之事遂已而龔鼎臣傳則云郡守杜衍既奉詔會問椽屬皆莫對鼎臣獨曰介寧有是願以闔門百口保證其死衍出懷中奏示之曰吾已保介矣君年少見義如是未可量也則一事而出兩人之保證固不妨各書乃二傳既詳載之而石介傳又一一鋪述不損一字何其不憚煩也至王旦傳則全取王文正公遺事一書抄撮成篇略無刪訂李綱傳至二萬餘言分上下二卷尙有奏議裁入也李全劇賊何亦分上下二卷乎宜其卷帙之繁也

宋史の巻帙最も繁なり。其の中實に必ずしも傳を立てざる可くして拉雜列入する者有り。侯益・張從恩・扈彥珂・藥元福・趙昂・李穀・竇貞固・李濤・趙上交・張錫・張鑄・邊歸謙・劉濤等の如きは皆五代に歴仕し、宋初は其の舊官に仍るに過ぎず、毫も功績無し。何ぞ必ずしも一一之を列せんや。其の意は以爲らく、五代史既に載せず、宋史に於て之を存せざるを得ざればなり。然れども李穀・李濤等の如きは五代に在りて尙ほ事蹟の記す可きもの有るも、其餘は本より書するに足らず。乃るに一概に之を列傳に入るは、仍ち其の歴官を敘するに過ぎず、今の仕途の履歷の如くするのみ。此れ亦た何の史冊を成すか。況んや薛懷讓等并して未だ宋に仕へずして之を宋史に入るをや。又た、王祐傳の如きは、既に其の盧多遜の趙普を傾害するの謀を拒むこと、又百口を以て符彥卿の無罪を保すこと、及び手づから三槐を植ゑ其の後必ず昌んらんことを卜ふこと等の事を敘すれば則ち其の子王旦の傳には必ずしも復た敘べず。而るに旦傳に又縷縷として之を述ぶ。神宗の時、新法行はれ、盡く坊渡の祠廟を斥賣す。張方平・南京留守と爲るや、管内に闕伯・微子廟有り、亦た賣る所の中に在り。方平、劉摯をして草奏せしめ、闕伯、商邱に遷り大火を主る。火は國家の盛徳の憑る所爲り。微子は宋の始封の君、本朝の開國は號を此に建つとし、其の祀を存するを乞ふ。神宗驚駭して亟やかに紙尾を批し、「神を慢り國を辱しむるは此より大なるは莫し。」と謂ふ。此の事既に之を方平傳に載せれば則ち劉摯傳只だ一二語を用ひ之を括る可し。乃るに又た一一詳敘するは何ぞや。李定の秀州判官を以て御史に薦授せらるや、宋敏求・蘇頌・李大臨皆之と力爭するは則ち其の事を一人の傳中に詳載し、其餘の各傳は但だ語は某人の傳に在りと云へば足れり。乃るに既に頌傳に詳載するも大臨傳にも又之を詳しく。石介の死するや、夏竦宿憾を挾み誣するに以て死せずして契丹に北走すると爲し、中使をして按驗せしむるを奏す。呂居簡傳は則ち云ふ、「中使按に來ること甚だ急なり。

居簡曰く、『棺を發きて空なれば則ち北走すること疑ひ無し。然らずんば則ち國家故無くして人の冢墓を剖くは、何をか以て訓と爲すや。』と。中使曰く、『然ば則ち奈何せん。』と。居簡曰く、『介死すれば必ず會葬の親族及び棺斂の人有り。召問して異無くば、令に即き軍狀を具にし以て應ふ可し。』と。中使之を然りとす。事遂に已む。』と。而るに龔鼎臣傳は則ち云ふ、『郡守の杜衍既に詔を奉じ會問するも按屬皆對へる莫し。鼎臣獨り曰く、『介寧んぞ是有りや。願くば闔門百口を以て其の死を保證せん。』と。衍懷中の奏を出だし之を示して曰く、『吾已に介を保せり。君年少なるも義を見すこと是の如し。未だ量る可からざるなり。』と。』と。則ち一事にして兩人の保證を出だすは、固より各々書するを妨げず。乃るに二傳既に之を詳載するも石介傳も又一一鋪述して一字を損なはず。何ぞ其れ煩を憚らざるや。王旦傳に至りては則ち王文正公遺事一書を全取し抄撮し篇を成すこと、略ぼ刪訂する無し。李綱傳は二萬餘言に至り上下二卷に分かつも、尙ほ奏議の裁入有ればなり。李全は劇賊にして何ぞ亦た上下二卷に分かつや。宜なり、其の卷帙の繁なるや。

【語注】

○王祐傳に、……『宋史』卷二百六十九、列傳第二十八王祐傳に「初、祐掌誥、會盧多遜爲學士、陰傾趙普、多遜累諷祐比己、祐不從。」と有り、「會符彥卿鎮大名、頗不治、太祖以祐代之。俾察彥卿動靜、謂曰『此卿故郷、故謂書錦者也。』祐以百口明彥卿無罪、且曰『五代之君、多因猜忌殺無辜、故享國不永、願陛下以爲戒。』彥卿由是獲免。故世謂祐有陰德。」と有る。しかしながら三槐を植えることは見えず。○旦傳に又た……『宋史』卷二百八十二、列傳第四十一王旦傳に「父祐、尙書兵部侍郎、以文章顯於漢、周之際、事太祖・太宗爲名臣。嘗論杜重威使無反漢、拒盧多遜害趙普之謀、以百口明符彥卿無罪、世多稱其陰德。祐手植三槐于庭、曰『吾之後世、必有爲三公者、此其所以志也。』」と有

る。○方平傳に載……『宋史』卷三百一十八、列傳第七十七張方平傳に「新法鬻河渡坊場、司農并及祠廟、宋闕伯・微子廟皆爲賈區。方平言『宋王業所基、闕伯封於商丘、以主大火。微子爲始封之君。是三祠者、亦不得免乎。』帝震怒、批牘尾曰『慢神辱國、無甚於斯。』於是天下祠廟皆得不鬻。」と有る。○劉摯傳只だ……『宋史』卷三百四十、列傳第九十九劉摯傳に「會司農新令、盡斥賣天下祠廟、依坊場河渡法收淨利。南京闕伯廟歲錢四十六貫、微子廟十三貫。摯歎曰『一至於此。』。往見留守張方平曰『獨不能爲朝廷言之耶。』。方平瞿然、托摯爲奏曰『闕伯遷商丘、主祀大火、火爲國家盛德所乘、歷世尊爲大祀。微子、宋始封之君、開國此地、本朝受命、建號所因。又有雙廟者、唐張巡、許遠孤城死賊、能捍大患。今若令承買小人規利、冗褻瀆慢、何所不爲、歲收微細、實損大體。欲望留此三廟、以慰邦人崇奉之意。』從之。又見方平傳。」と有る。○頌傳に詳載……『宋史』卷三百四十、列傳第九十九蘇頌傳に「大臣薦秀州判官李定、召見擢太子中允、除監察御史裏行。宋敏求知制誥、封還詞頭。復下、頌當制、頌奏、『祖宗朝、天下初定、故不起孤遠而登顯要者。眞宗以來、雖有幽人異行、亦不至超越資品。今定不由銓考、擢授朝列。不緣御史、薦實憲臺。雖朝廷急於用才、度越常格、然隳紊法制、所益者小、所損者大、未敢具草。』。次至李大臨、亦封還。神宗曰『去年詔、臺官有闕、委御史臺奏舉、不拘官職高下。』頌與大臨對曰『從前臺官、於太常博士以上、中行員外郎以下舉充。後爲難得資敘相當、故朝廷特開此制。止是不限博士・員外郎、非謂選人亦許奏舉。若不拘官職高下、并選人在其間、則是秀州判官亦可爲裏行、不必更改中允也。今定改京官、已是優恩、更處之憲臺、先朝以來、未有此比。倖門一啓、則士塗奔競之人、希望不次之擢、朝廷名器有限、焉得人人滿其意哉。』。執奏不已、於是竝落知制誥、歸工部郎中班、天下謂頌及敏求・大臨爲『三舍人』。」と有る。○大臨傳にも……『宋史』卷三百三十一、列傳第九十九李大臨傳に「會李定除御史、宋敏求・蘇頌相繼封還詞命、次至大臨、大臨亦還之。帝批『去歲詔書、臺官不拘官職奏舉、後未審更制也。』頌・大臨合言『故事、臺官必以員外郎・博士、近制但不限此、非謂選人亦許之也。定以初等職官超朝籍、躐憲臺、國朝未有。倖門一開、名器有限、

安得人人滿其意哉。』復詔諭數四、頌・大臨故爭不已、乃以累格詔命、皆歸班、大臨以工部郎中出知汝州。」と有る。

○呂居簡傳は：―『宋史』卷二百六十五、列傳第二十四呂蒙正傳附呂居簡傳に「慶歷中、居簡提點京東刑獄、時夏竦有憾於石介。介死、竦言於上曰『介未嘗死、北走鄰國矣。』乃遣中使發棺驗之。居簡謂曰『萬一介果死、則朝廷爲無故發人之墓、奈何。』中使曰『於君何如。』居簡曰『介死、當時必有內外親族及門生會葬、問之可也。』中使乃令結狀保證以聞、介事乃白。居簡長者、其行事多類此。」と有る。○龔鼎臣傳は：―『宋史』卷三百四十七、列傳第一百六龔鼎臣傳に「徂徠石介死、讒者謂介北走遼、詔兗州劾狀。郡守杜衍會問、掾屬莫對。鼎臣獨曰『介寧有是、願以闔門證其死。』衍探懷出奏稿示之曰『吾既保介矣。君年少見義如是、未可量也。』」と有る。○石介傳も又：―『宋史』卷四百三十二、列傳第一百九十一石介傳に「會徐狂人孔直溫謀反、搜其家得介書。夏竦銜介甚、且欲中傷杜衍等、因言介詐死、北走契丹、請發棺以驗。詔下京東訪其存亡。衍時在兗州、以驗介事語官屬、衆不敢答、掌書記龔鼎臣願以闔族保介必死、衍探懷出奏稿示之曰『老夫已保介矣。君年少、見義必爲、豈何量哉。』提點刑獄呂居簡亦曰『發棺空、介果走北、拏戮非酷不然、是國家無故剖人家墓、可以示後世。且介死必有親族門生會葬及棺斂之人、苟召問無異、即令具軍令狀保之、亦足應詔。』於是衆數百保介已死、乃免斲棺。子弟羈管他州、久之得還。」と有る。

【現代語譯】

『宋史』の卷數や分量は最も繁雜である。その中は實際には必ずしも傳を立てなくてよいのに無暗に羅列されている者がいる。侯益・張從恩・扈彥珂・藥元福・趙昂・李穀・竇貞固・李濤・趙上交・張錫・張鑄・邊歸謙・劉濤等のような者たちは皆五代の王朝に歴任したのであって、宋初ではその古い官職によつたに過ぎず、少しも（宋朝に對して）功績が無い。どうして一々彼らを列傳に入れる必要があるのか。その意義は思うに、『五代史』には記載されていないので、

『宋史』において記載しなければいけなかったからであろう。けれども李穀・李濤等のような者はその事蹟に記すべきものがあるが、その他はもとより記載するに足らない。しかしながら一括りに彼らを列傳に挿入することは、それは就いた官職の羅列に過ぎず、今の時代の官途の履歴ようなものではない。これはまたどのような史書の體裁を成すのか。ましてや、薛懷讓等はみな宋に仕えていないのに『宋史』に入れているのはどうしたことだろうか。また、王祐傳などは、すでに王祐が盧多遜の趙普を害そうとする謀を拒否したこと、また多くの者の供述によって符彥卿の無罪を保證したこと、及び自ら三本の槐を植えて子孫の繁榮を占ったことなどは、それはその子である王旦の傳に必ずしも再び述べることではない。しかし、王旦傳にまたつらつらと記載している。神宗の時、新法が施行され、街巷の祠廟はみな賣りだされていた。張方平が南京留守となると、その管轄内に關伯・微子廟があり、また賣りに出されている所であった。張方平は劉摯に草奏させ、關伯は商丘に遷り大火を掌った。火は宋朝の徳の據るところである。微子は宋という國に始めて封ぜられた君主であり、本朝建國の際の號はこれに由來するとし、その祠廟での祭祀を存續させることを請うた。神宗は驚愕狼狽して書面の末尾に決裁を書き、「神靈を侮り國家を辱めることはこれより大なるものはない。」と言った。この事柄はすでに張方平傳に記載しておれば、劉摯傳にはただ一、二文でもってまとめべきである。けれどもまた一々詳しく記載しているのは何故だろうか。李疋が秀州判官から御史に拔擢された時、宋敏求・蘇頌・李大臨が皆力を盡くして諫めたことはその事を一人の傳の中に詳しく記載し、その他は各傳にただその文章は某人の傳にあるといえ、事足りる。けれどもすでに蘇頌傳に詳しく記載しているのに李大臨傳にも又たこの事を詳しくしている。石介が死んだ時、夏竦は宿怨を懷いていたので誣告して死なずに契丹に逃走したとして、皇帝の使いに檢死確認させることを奏上した。呂居簡傳には、「皇帝の使いが檢死來るのが甚だ急であった。呂居簡は言った、『棺を發いて空であれば逃走したことは疑い無い。空でなかった場合は國家が故も無く人の墳墓を掘り返したことになり、どのようにして訓示をなすのか』と。

使いは言った、『ならばどうせよ。』と。呂居簡は言った、『石介が死んだのであれば必ず葬儀に参加した親族及び棺に納めた人物がいるはずだ。召問して異様な事が無ければ、法令に即して軍の報告書を添え、そして陛下への報告をするべきである。』と。皇帝の使いはそれが妥當であるとした。そうしてこの事は遂に終息した。」と言っている。しかし龔鼎臣傳には、「郡守の杜衍はすでに詔を奉じて會場に集めた者達に問いただすも、官吏達で返答する者は皆無だった。（しかし）龔鼎臣だけは、石介にどうしてそうした事がありえましようか。石氏一門の供述によってその死を保證させて下さい。」と言った。杜衍は懷中の奏書を取り出し示して言った、「私はすでに石介の死を保證した。君は年少であるがこのように義を示した。どれほどの器量であるか知れないな。」と言った。」と言っている。一つの事件に對して二人の保證を出すならば、もとより各傳に書くことの妨げとはならない。しかし二人の傳ですでにこの事を詳しく記載しているのに石介傳にもまた一々記述して一字も減らしていない。なんとまあ煩雜さを避けないことであろうか。王旦傳に至っては『王文正公遺事』内の一文章を全て取り書き寫してほとんど文字を削ったり改訂したりしていない。李綱傳は二萬字餘りを費やし上下二卷に分けているが、それでも奏議の文章を載せ入れているからである。李全は劇賊であるのにどうしてまた上下二卷に分けているのか。（そうであるから）その内容の分量などが繁雜になるのは致し方ないだろう。

（大兼健寛）

【原文】

10 宋史二

宋史之病往往有數人共一事而立傳時則以其事分繫之若各爲其事而不相同者員州王則之亂討平之者明鑑文彥博也而鄭驥傳

則云王則反討平之竟似驥一人之功矣不特此也楊燧傳謂燧攻貝州穴城以入賊平功第一劉閔傳又謂閔從攻貝州穿地道穴城閔先入衆始從遂登陴引繩而上遲明師畢入貝州平功第一則卽穴城一事又各擅第一功矣夏竦之賜諡文正也司馬光劉敞俱駁之乃光傳則曰光謂諡之美者莫如文正竦何人足以當之乃改諡文莊文莊略不及敞則似光一人所駁矣而敞傳又曰敞疏三上乃改諡文莊亦略不及光又似敞一人所駁矣高宗以邢后父煥除徽猷閣待制孟太后兄子忠厚除顯謨閣學士衛膚敏劉珪皆力言非制乃膚敏傳不及珪珪傳亦不及膚敏亦似兩人各爭一事蓋作傳者欲人人各記其功遂不自知其錯雜如此

【書き下し】

10 宋史二

宋史の病は往往にして數人一事を共にするも傳を立つるの時は、則ち其の事を以て分かちて之を繋ぎ、各々其の事を爲し、而して相同じからざるが若き者有り。貝州の王則の亂、之を討平する者は明鎬・文彥博なり。而して鄭驥傳則ち云ふ、「王則反く。之を討平す。」と。竟に驥一人の功に似たり。特だに此れのみならざるなり。楊燧傳に謂ふ、「燧、貝州を攻め、城に穴して以て入る。賊平ぐ。功第一なり。」と。劉閔傳に又謂ふ、「閔、貝州を攻むるに従ひ、地道を穿ち城に穴す。閔先に入る。衆始めて従ひ、遂に陴に登り繩を引きて上り、遲明に師畢く入り、貝州平ぐ。功第一なり。」と。則ち城に穴するの一事に即けば、又各々第一功を擅にするなり。夏竦の諡文正を賜るや、司馬光・劉敞俱に之を駁す。乃るに光傳には則ち曰ふ、「光謂ふ、『諡の美は文正に如くは莫し。竦何人ぞ、以て之に當つるに足らんや。』」と。乃ち改めて文莊と諡す。」と。略して敞に及ばざれば則ち光一人駁する所に似たり。而して敞傳に又た曰ふ、「敞疏して三たび上る。乃ち改めて文莊と諡す。」と。亦た略して光に及ばざれば、又敞一人駁する所に似たり。高宗邢后の父煥を以て徽猷閣待制に除し、孟太后の兄の子忠厚もて顯謨閣學士に除す。衛膚敏・劉珪皆な力めて「制に非ず。」と言ふ。乃

るに膚敏傳は珏に及ばず。珏傳も亦た膚敏に及ばず。亦た兩人各々一事を争ふに似たり。蓋し傳を作る者は、人人に各々其の功を記さんと欲し、遂に自ら其の錯雜此くの如きを知らず。

【語注】

○王則反く……『宋史』卷三百一、列傳第六十、鄭驥傳。○燧貝州を攻……『宋史』卷三百四十九、列傳第一百八、楊燧傳。○閻貝州を攻……『宋史』卷三百五十、列傳第一百九、劉閻傳。○光謂ふ諭の……『宋史』卷三百三十六、列傳第九十五、司馬光傳。○敵疏して三……『宋史』卷三百二十九、列傳第七十八、劉敵傳。○膚敏傳は珏……『宋史』卷三百七十八、列傳第一百三十七、衛膚敏傳。○珏傳も亦た……『宋史』卷三百七十八、列傳第一百三十七、劉珏傳。

【現代語譯】

宋史の缺點はえてして複数の人間が関わった一つの事件を傳にする時に、その内容をそれぞれ分けて書き、あたかもそれぞれが異なる事件に関わったかのようになっていることがある。(例えば、)貝州の王則の亂は、平定した者は明鎬と文彦博である。しかし鄭驥傳には、「王則が反亂を起こした。(鄭驥が)これを平定した。」とあれば、鄭驥一人の功績であるかのように見えてしまう。(このような例は)ここだけのことではない。楊燧傳には、「楊燧は貝州を攻め、城壁に穴をあけ、侵入し、賊は平定された。第一功である。」と書かれている。また劉閻傳には、「劉閻は貝州を攻めるのに從軍し、地下道を掘り、城壁に穴をあけた。劉閻は先に侵入した。軍勢もそれに従って、城壁の低い所に登り、繩を引いて城壁を登り、夜が明けるところに、軍勢は全て入城し、貝州は平定された。第一功である。」とある。つまり城壁に穴をあけたことについて、それぞれが第一功を自分のものとしている。夏竦が文正という諭を賜ったことについて、司

馬光と劉敞の二人がこれに反対した。司馬光傳には、「司馬光は『諡の美しさと言ったら、文正に勝るものはありません。夏竦はその諡を贈るに足る人物でしょうか。』と言った。そのため文莊に改めた。」と書かれている。劉敞のことに ついて省略されているため、司馬光一人が反対したかのようになっている。そして劉敞傳には、「劉敞は三回上奏した。 そのため文莊に改めた。」と書かれており、こちらも司馬光のことが省略されているため、同じように劉敞一人が反対 したかのようになっている。高宗は邢皇后の父である邢煥を徽猷閣待制に任命し、孟太后の兄の子である孟忠厚を顯謨 閣學士に任命した。衛膚敏と劉珏は「制度にあっていない。」と強く言上した。それなのに衛膚敏傳には劉珏について の記述がなく、また劉珏傳にも衛膚敏についての記述がない。この例もまた二人がそれぞれに同一の事について争った かのようになっていいる。思うに、傳を作る者は人ごとにそれぞれの功について記述しようと考えており、これらの例の ように内容を矛盾させていることに氣付いていないのである。

(佐藤 良)

【原文】

11 宋史三

宋史楊延昭傳延昭卒帝遣中使護櫬以歸河朔人多望柩而泣按無尸曰櫬有尸曰柩中使所護歸者即柩也乃既曰櫬又曰柩意在稍 變一字以避重複而不知已失其字義矣韓世忠傳世忠屯焦山謂兀朮必登金山龍王廟觀虛實乃令百人伏廟中百人伏岸側果有 五騎闖入廟兵喜先鼓而出僅得二人逸其三中有絳袍玉帶既墜而馳者訪之即兀朮也按金山在水中豈能騎而入復騎而逃此必誤 也輿地紀勝謂伏兵北固山龍王廟此較近理乃宋史於此等處亦略不訂正岳飛傳言紹興六年太行山忠義社梁興等慕義來歸其後 又云先是紹興五年飛遣梁興等招結兩河豪傑梁興既於六年始來歸何得於五年先奉命去一撤離喝也吳玠傳作撤離喝李顯忠傳

又作撒里曷一兀朮也韓世忠岳飛等傳作兀朮宋汝爲葉夢得向子韶傳又作完顏宗弼史高之卽彌遠從子也乃傳但云慶元府郵人似與彌遠另族不相涉矣其於宋與元交兵之處余玠謝枋得等傳稱大元兵忠義傳則曰北兵亦多不畫一葉夢得既列於文苑傳則其生平著述如石林燕語避暑錄話之類亦應敘入乃本傳侈言政績絕不及文學則何以列之文苑乎曹勛傳紹興二十九年勛拜昭信軍節度使副王倫爲稱謝使至金金主將侵准勛與倫歸言和好無他云云按倫傳建炎元年倫卽爲通問使至金紹興二年粘罕使倫歸報七年再使金回八年又往偕張通古來南九年再充使奉迎梓宮太后被拘河間十四年金人欲官之倫不從乃被縊死是倫之死在紹興十四年安得二十九年尙有與曹勛使金之事又曹友聞傳元兵攻我休關敗都統李顯忠軍遂入興元按顯忠係紹興中歸宋卒於乾道中距友聞與元兵戰時已六十七年安得尙統軍耶或另一李顯忠然史又不分析言之陳宜中傳遣張全合尹玉麻士龍授常州玉士龍皆戰死全不發一矢奔還文天祥請誅全宜中釋不問文天祥傳亦謂朱華尹玉等戰五牧敗兵渡水挽全軍舟全軍斷其指皆溺死全不發一矢走歸是張全並未嘗戰也而尹玉傳乃云淮將張全廣將朱華大戰於五牧則張全又在力戰之內矣功罪混淆莫此爲甚又劉師勇與姚訢守常州受圍數月城陷師勇拔柵戰且行其弟馬墮墮不能去師勇舉手與訣而去是師勇守常至城破始去也事見張世傑傳及元史伯顏傳并鄭所南集而王安節傳則謂師勇復常州後卽赴平江使安節在常拒守又似師勇未嘗與常州之難者此皆文之失檢者也

【書やト】

11 宋史 二

宋史楊延昭傳に「延昭卒し、帝中使を遣はし櫬を護り以て歸らしむ。河朔の人多く櫬を望みて泣く。」と。按ずるに、尸無きを櫬と曰ひ、尸有るを柩と曰ふ。中使の護り歸る所は、卽ち柩なり。乃ち既に櫬と曰ひ、又柩と曰ふ。意稍かに一字を變じ以て重複を避くるに在りて、已に其の字義を失ふを知らず。韓世忠傳に「世忠焦山に屯す。兀朮至らば

必ず金山の龍王廟に登り虚實を觀んと謂ひ、乃ち百人に令して廟中に伏し、百人をして岸側に伏せしむ。果たして五騎闖入する有り、廟兵喜び、先に鼓して出で、僅かに二人を得、其の三を逸す。中に絳袍・玉帶して既に墜ちて馳せる者有り、之を訪ぬれば、即ち兀朮なり。」と。按ずるに、金山は水中に在れば、豈に能く騎して入り、復た騎して逃げんや。此れ必ず誤りなり。輿地紀勝に「兵を北固山の龍王廟に伏す。」と謂ふ。此れ較る理に近し。乃ち宋史は此れ等の處に於いても亦た略して訂正せず。岳飛傳に「紹興六年、太行山の忠義社の梁興等、義を慕ひ來歸す。」と言ひ、其の後に又「是れより先、紹興五年、飛梁興等を遣はし兩河の豪傑を招結せしむ。」と云ふ。梁興は既に六年に於いて始めて來歸す。何ぞ五年に於いて先に命を奉じ去くことを得んや。一の撒離喝や、吳玠傳は「撒離喝」に作り、李顯忠傳は又「撒里曷」に作る。一の兀朮や、韓世忠・岳飛等の傳は「兀朮」に作り、宋汝爲・葉夢得・向子韶傳は又「完顏宗弼」に作る。史嵩之は即ち彌遠の從子なり。乃るに傳には但だ「慶元府鄆の人」と云ふのみ。彌遠と族を另かち相涉らざるに似たり。其の宋と元の兵を交へるの處に於いては、余玠・謝枋得等の傳は「大元兵」と稱し、忠義傳は則ち「北兵」と曰ふ。亦た多く畫一ならず。葉夢得既に文苑傳に列せば、則ち其の生平の著述の石林燕語・避暑錄話の類の如きは、亦た應に敘入すべし。乃るに本傳政績を侈言し、絶えて文學に及ばざれば、則ち何を以て之を文苑に列するや。曹勛傳に「紹興二十九年、勛は昭信軍節度使に拜せられ、王倫の稱謝使と爲り金に至るを副く。金主將に准を侵さんとし、勛と倫とは歸りて、和好に他無し云云と言ふ。」と。按ずるに、倫傳に「建炎元年、倫即ち通問使と爲り金に至る。紹興二年、粘罕倫をして歸報せしむ。七年、再び金に使用して回る。八年、又往きて張通古と偕に南に來たる。九年、再び使に充てられ梓宮と太后を奉迎し、河間に拘へらる。十四年、金人之を官にせんと欲するも、倫從はず。乃ち鎔死せらる。」と。是れ倫の死するは紹興十四年に在り、安んぞ二十九年尙ほ曹勛と金に使ひするの事有るを得んや。又曹友聞傳に「元兵我が休關を攻め、都統李顯忠軍を敗り、遂に興元に入る。」と。按ずるに、顯忠は係れ紹興中末に歸し、乾道中に

卒す。友聞と元兵と戦ふの時を距つこと已に六七十年、安んぞ尙ほ軍を統ぶるを得んや。別の一李顯忠を或ふも、然ども史は又分析して之を言はず。陳宜中傳に「張全を遣はして尹玉・麻士龍を合せ常州を援けしむるも、玉・士龍皆戦死す。全一矢をも發たずして奔げ還る。文天祥 全を誅せんと請ふも、宜中釋して問はず。」と。文天祥傳も亦た「朱華・尹玉等五牧に戦ひ敗れ、兵水を渡り、全軍の舟を挽くに、全軍其の指を斷ち、皆溺死し、全一矢をも發たずして、走げ歸る。」と謂ふ。是れ張全並びに未だ嘗て戦はざるなり。而れども尹玉傳は乃ち「淮將張全・廣將朱華大いに五牧に戦ふ。」と云へば、則ち張全も又力戦の内に在り。功罪の混淆此より甚だしきと爲す莫し。又「劉師勇 姚書と常州を守るも圍を受くること數月、城陷ち、師勇柵を抜き戦ひて且に行かんとするに、其の弟の馬は暫に墮ち躍るも去ること能はず。師勇 手を擧げ與に訣して去る。」と。是れ師勇常を守り、城破るるに至りて始めて去るなり。事は張世傑傳及び元史伯顔傳並びに鄭所南集に見ゆ。而れども王安節傳は則ち「師勇 常州を復して後、即ち平江に赴き、安節をして常に在り拒守せしむ。」と謂ふ。又師勇未だ嘗て常州の難に與らざる者に似たり。此皆文の檢を失せし者なり。

【語注】

○宋史楊延昭……『宋史』卷二百七十二、列傳第三十一、楊延昭傳に「延昭智勇善戰、所得奉賜悉犒軍、未嘗問家事。出入騎從如小校、號令嚴明、與士卒同甘苦、遇敵必身先、行陣克捷、推功於下、故人樂爲用。在邊防二十餘年、契丹憚之、目爲楊六郎。及卒、帝嗟悼之、遣中使護櫬以歸、河朔之人多望柩而泣。錄其三子官、其常從・門客亦試藝甄敘之。」と有る。○韓世忠傳に……『宋史』卷三百六十四、列傳第一百二十三、韓世忠傳に「初、世忠謂敵至必登山廟觀我虛實。遣遺兵百人伏廟中、百人伏岸澗、約聞鼓聲兵先入、廟兵合擊之。金人果五騎闖入。廟兵喜先鼓而出、僅得二人、逸其三。中有絳袍玉帶既墜而復馳者。詰之、乃兀朮也。是役也、兀朮兵號十萬、世忠僅八千餘人。」と有る。『輿地紀勝』

は宋の王象之の撰。佚書。趙翼が何に據ってこの佚文を見たかは未詳。類似の文は宋の史彌堅の『嘉定鎮江志』卷三、攻守形勢「四年四月兀朮入寇」の條にも見える。○岳飛傳に紹：『宋史』卷三百六十五、列傳第一百二十四、岳飛傳に「六年、太行山忠義社梁興等百餘人、慕飛義率衆來歸。」と有り、その下文に「先是、紹興五年、飛遣梁興等布德意、招結兩河豪傑、山砦韋銓・孫謀等歛兵固堡、以待王師、李通・胡清・李寶・李興・張恩・孫琪等舉衆來歸。」と有る。○一の撒離喝：『宋史』卷三百六十六、列傳第一百二十五、吳玠傳に「(建炎)四年春、升涇原路馬步軍副總管。金帥婁宿與撒離喝長驅入關、端遣玠拒于彭原店、而擁兵邠州爲援。金兵來攻、玠擊敗之、撒離喝懼而泣、金軍中目爲啼哭郎君。」と有り、同卷三百六十七、列傳第一百二十六、李顯忠傳に「元帥撒里曷來同州、顯忠以計執之、馳出城。」等有る。○一の兀朮や：『宋史』卷三百六十四、列傳第一百二十三、韓世忠傳に「兀朮將入寇、帝召諸將問移蹕之地。」等と有り、同卷三百六十五、列傳第一百二十四、岳飛傳に「四年、兀朮攻常州、宜興令迎飛移屯焉。」等と有る他、同卷三百六十六、列傳第一百二十五、劉錡傳等も「兀朮」に作る。また、同卷三百九十九、列傳第一百五十八、宋汝爲傳に「時劉豫節制東平、丞相呂頤浩因致書豫。汝爲行次壽春、遇完顏宗弼軍、不克與時亮會、獨馳入其壁、將上國書。」と有り、同卷四百四十五、列傳第二百四、文苑七、葉夢得傳に「金都元帥宗弼犯含山縣。」と有る。同卷四百四十七、列傳第二百六、忠義二、向子韶傳には見えず。但し向子韶傳と同卷下文の楊邦乂傳に「金帥完顏宗弼既入城。」と有る。○史高之は即：『宋史』卷四百一十四、列傳第一百七十三、史高之傳に「史高之字子由、慶元府鄞人。」と有る。○其の宋と元：『大元兵』は、例えば『宋史』卷四百一十六、列傳第一百七十五、余玠傳に「嘉熙三年、與大元兵戰于汴城・河陰有功。」と有り、同卷四百二十五、列傳第一百八十四、謝枋得傳に「德祐元年、呂文煥導大元兵東下」云々等と有る他、同卷四十一、本紀第四十一、理宗本紀に「(寶慶三年十二月壬申)大元兵破關外諸隘、四川制置鄭損棄三關。」と有るのを初めとして各本紀列傳に散見される。また忠義傳の「北兵」は、同卷四百四十九、列傳第二百八、忠

義四以下に散見する。なお、謝枋得と同卷の劉應龍傳には「大元兵度江、朝野震動。……未幾北兵退。」と有る他、各本紀列傳に「大元兵」と「北兵」の混在が見られる。○葉夢得既に……『宋史』卷四百四十五、列傳第二百四、文苑七、葉夢得傳を見るに、南遷直後、揚州に留まる高宗に南巡を請う等の「政績」が見られるが、寧ろ、王才・寇宏・陳卞等を論じて劉豫の齊兵を退け、張俊に諸軍の進發を急かして金兵を退ける等の軍功も目立つ。○曹勛傳に紹……『宋史』卷三百七十九、列傳第一百三十八、曹勛傳に「紹興」二十九年、拜昭信軍節度使、副王倫爲稱謝使。時金主亮已定侵淮計、勛與綸還、言鄰國恭順、和好無他、人譏其妄。」と有る。「王倫」は下文に「勛與綸還」と有るように「王綸」の誤りであり、王綸こそが曹勛と共に金に使用した事は高宗紀及び卷三百七十二、列傳第一百三十一、王綸傳に「二十九年六月、朝論欲遣大臣爲泛使覬敵、且堅盟好。綸請行、乃以爲稱謝使、曹勛副之。」と有ることからも明かである。或いは趙翼所見の『宋史』は「勛與綸還」も「倫」に作ったのか、趙翼の以下の議論は「王倫」と「王綸」を混同したことに因る。なお王倫は同卷三百七十一、列傳第一百三十三に傳有り。○又曹友聞傳……『宋史』卷四百四十九、列傳第二百八、忠義四、曹友聞傳に「北兵先攻武休關、敗都統李顯忠軍、遂入興元。」と有る。李顯忠は、同卷三百六十七、列傳第一百二十六に傳有り。本傳及び同卷二十九、高宗本紀六・同卷三十五、孝宗本紀三に據れば、李顯忠は紹興九年に南歸し、乾道年間を経て、淳熙五年七月に薨じている。○陳宜中傳に……『宋史』卷四百一十八、列傳第一百七十七、陳宜中傳に「(德祐元年)一月、遣張全合尹玉・麻士龍兵援常州、玉與士龍皆戰死、全不發一矢、奔還。文天祥請誅全、宜中釋不問。已而、常州破、兵薄獨松關、鄰邑望風皆遁。」と有り、同卷四百一十八、列傳第一百七十七、文天祥傳に「十月、天祥入平江、大元兵已發金陵入常州矣。天祥遣其將朱華・尹玉・麻士龍與張全援常。至虞橋、士龍戰死。朱華以廣軍戰五牧、敗績。玉軍亦敗、爭渡水、挽全軍舟、全軍斷其指、皆溺死。玉以殘兵五百人夜戰、比旦皆沒。全不發一矢走歸。大元兵破常州、入獨松關。宜中。夢炎召天祥、棄平江、守餘杭。」と有り、同卷四百五十、列傳第二百九、忠

義五、尹玉傳に「及天祥至平江、調玉同淮將張全・廣將朱華拒大兵、戰于伍牧。全等軍敗、以淮・廣軍先遁。曾全・胡遇・謝榮・曾玉以贛州四指揮軍亦遁。唯玉殘軍五百殊死戰。」と有る。○又劉師勇姚……『宋史』卷四百五十一、列傳第二百一十、忠義六、張世傑傳に「劉師勇者、廬州人。……時姚訢復常州、似道命師勇以淮兵取呂城。朝廷加師勇和州防禦使、助訢守常、而以張彥守呂城、命兵拒大軍。戰失利、彥馬弱、陷淖中見執、呂城失守、常州勢益孤。大軍置彥城下招降、師勇以大義斥彥、彥慚而退。又遣范文虎來諭、師勇伏弩射走之。常受圍數月、援兵絕、有羣鷓鴣飛繞城、衆惡爲不祥。俄而城陷。師勇拔柵、戰且行、其弟馬墮暫躍不能出。師勇舉手與訣而去。淮軍數千人皆鬥死。有婦人伏積屍下、闕淮兵六人反背相拄、殺敵十百人乃殪。師勇從二王至海上、見時事不可爲、憂憤縱酒卒。葬于鼓山。」と有り、同卷四百五十、列傳第二百九、忠義五、王安節傳に「劉師勇復常州、攻走王良臣、師勇還平江、以安節與張詹守常。已而良臣導大兵攻常、常城素惡、安節等築柵以守、相拒兩月不下。大元丞相伯顏自將攻之、屢遣使招降、亦不下。丞相怒、麾兵破其南門、安節揮雙刀率死士巷戰、臂傷被執。有求其姓名者、安節呼曰『我王堅子安節也。』降之不得、乃殺之。」と有る。

【現代語譯】

『宋史』楊延昭傳に「延昭が亡くなると、皇帝は中使を派遣して柵を守らせ持ち歸らせた。河朔の多くの人々は柵を見て涙を流した。」とある。考えてみると、屍が入っていない柵を「柵」と言い、屍が入っている柵を「柵」と言う。中使が守り持ち歸って来た柵は「柵」である。それをここでは「柵」と言い、さらに「柵」と言っている。その意圖は僅か一字を變えて重複を避ける所にあるにはあるが、その文字の本義が失われていることに気づいていないのだ。韓忠忠傳に「世忠は焦山に駐屯すると、『兀朮が來たら必ず金山の龍土廟に登って我らの様子を見るだろう。』と考え、そこで

廟中に伏兵百人を配備させ、川岸にも伏兵百人を配備させた。果たして五騎の騎馬が突如やって来たが、廟中の伏兵が喜んで先にドンドンと太鼓をならして出てきたので、わずか二人を捕らえただけで、残りの三人は取り逃がした。その中には紅の衣に玉の帯を身につけた者が見え、間もなくして落馬したが走って逃げたので、あの者は誰かと尋ねると、それこそ兀朮であつた。」とある。考えてみると、金山は水中（川に囲まれた土地）にあるのだから、どうして馬に乗りながらにして進入・逃亡できるのだろうか。この記述は確實に間違いないである。『輿地紅勝』に「伏兵は北固山の龍王廟にいた。」と言っている。この記述は『宋史』よりいくぶんか理に適っている。つまり『宋史』はこれらの箇所においてもそのまま訂正していないのだ。岳飛傳に「紹興六年、太行山の忠義社の梁興らは、岳飛を慕って歸順した。」と言っており、その後にもまた「これ以前に、紹興五年、岳飛は梁興らを派遣して兩河の豪傑を呼び寄せて義兄弟の契りを結ばせた。」と言っている。梁興は紹興六年にはじめて歸順したのに、どうして紹興五年に命令を受けて（兩河の豪傑の元に）行けるのだろうか。また、一人の撒離喝でありながら、吳玠傳では「撒離喝」に作り、李顯忠傳では「撒里喝」に作っている。また一人の兀朮でありながら、韓世忠・岳飛の傳では「兀朮」に作り、宋汝爲・葉夢得・向子詔の傳ではまた「完顔宗弼」に作っている。史高之はつまり彌遠の甥である。しかし史高之の傳には「慶元府の鄞の人」と言うだけである。史高之と彌遠とは別族であつて關わりがないように書かれている。宋と元の戦いについての記述では、余玠・謝枋得などの傳では「大元の兵」と稱していて、忠義傳では「北兵」と言っている。これらもまた統一されていない。葉夢得は文苑傳に収録しているならば、その生涯の著述作品である『石林燕語』や『避暑錄話』の類も、當然記入すべきである。しかし本傳では政事上の功績について誇張して言い、全く文學の話に及ばないのに、なぜ文苑傳に収録しているのか。曹助傳に「紹興二十九年、助は昭信軍節度使に任命され、王倫が稱謝使になつて金に行くのを補佐し、金主が准を侵略しようとした時、曹助と王倫は（宋に）歸つて、『講和をしたほうがよい云々』と言つた。」とある。考える

に、王倫傳に「建炎元年、王倫は通問使となつて金に行き着いた。……紹興二年、粘罕は王倫に歸國、報告させた。……七年、再び金に派遣されて歸つて來た。……八年、また金に行き張通古とともに宋に歸つて來た。……九年、再び使者に任じられて徽宗の梓樞と太后をお迎えするも、河間で捕らえられた。……十四年、金人が王倫を官職につけようとしたが、王倫はこれに従わず、絞首刑で殺された。」とある。これは王倫の死は紹興十四年にあるのであつて、どうして二十九年になおも曹勛とともに使者として金に行く事があり得ようか。さらに曹友聞傳に「元兵は我々の休關を攻めて、都統・李顯忠軍を敗り、すかさず興元に入った。」とある。考えるに、顯忠は紹興中に宋に歸朝して、乾道中に死んでゐる。友聞が元兵と戦う時と六、七十年の隔たりがあり、どうしてなお軍を統率できようか。別に李顯忠なる人物がいゝたかとも疑えるが、しかし史官はこれについて分析して言及していない。陳宜中傳に「(陳宜中は)張全を派遣して(平江の)尹玉・麻士龍と合流させて常州を救援させたが、尹玉・麻士龍は二人とも戦死した。張全は一矢も放たずに逃げ歸つた。文天祥は張全を處刑しよう請願したが、陳宜中は彼をゆるして罪に問わなかつた。」とある。文天祥傳にも「朱華・尹玉らは五牧で敗れ、兵が川を渡ろうと、張全の軍の船を引くと、張全の軍はそれらの兵の指を切り落とし、みな溺れ死に、張全は一矢も放たずに逃げ歸つた。」と言つてゐる。これらの事例では、張全は一戦も交えなかつたのである。しかし尹玉傳では「淮將張全、廣將朱華は大いに五牧で戦つた。」と言つてゐるのだから、張全も力戦した一人に擧げられている。功罪が混亂することは、これよりひどくなることはあるまい。また「劉師勇と姚訾は常州を守つていたが、圍まれること數か月し、城が陥落されると、劉師勇は柵を突破して戦い進もうとしたが、弟は馬が穴に落ちて抜け出すことが出来なかつた。劉師勇は手を擧げて別れを告げて逃げ去つた。」とある。ここでの劉師勇は常州を守り、城が陥落した後に始めて逃げ去つたのだ。このことは張世傑傳および『元史』伯顔傳、ならびに『鄭所南集』に見られる。しかし王安節傳では「師勇は常州を恢復すると、直ちに平江に赴き、安節を常州に残して守らせた。」と言つ

ている。これではまた師勇が一度も常州の難に關わっていない者のようだ。これらはすべて確認を怠った文章である。

(今關雄史)

【原文】

12 宋史四

宋史卷帙雖繁而事跡又多有遺漏者太宗雍熙元年爲遼景宗乾亨四年是歲景宗崩聖宗即位乃宋史本紀竟不載東軒筆錄王曾爲三元劉子儀語以一生喫著不盡曾以志不在溫飽對此可見其人品素定而曾傳無之范文正遣其子純仁南歸純仁見石曼卿之喪未葬遂以所載麥四十斛連舟與之助其葬費此亦可見其高誼而純仁傳無之蔡襄在泉州新造密雲龍團茶進上歐陽修聞之曰君謨士人亦復爲此耶襄傳亦不載朱子語類蘇過爲梁師成妻持服過傳亦不載名臣言行錄狄青討儂智高至賓州夜宴將吏青忽起更衣命親吏傳令勸酒青已潛出崑崙關破賊此事青傳亦不載俞文豹清夜錄靖康之變上皇將赴金軍中書舍人姜堯臣極諫不可往番使以骨朵擊之死曹勛北狩錄四太子求王婉容爲黏罕子婦婉容自刎死此二事所必宜載者而列傳皆無之蜀賊王均之亂討平之者楊懷忠之功居多乃不爲立傳僅於雷有終傳附見張益之傳謂其父泌自有傳而列傳竝無張泌湧幢小品謂徽宗以五月五日生以俗忌故改壽辰爲十月十日而本紀亦不載錢氏私誌泰州徐神翁有道術蔡京常問以國運神翁曰天方遣許多魔君作壞世界太師亦是一箇又哲宗遣使以後嗣爲問神翁書吉人二字以達後徽宗登極乃知卽御名佶字也此宜入方技傳而方技亦不載

【書中トコ】

12 宋史四

宋史は卷帙繁たりと雖も、一れれども事跡又た多く遺漏する者有あり。太宗の雍熙元年は、遼の景宗の乾亨四年爲り。是

の歳景宗崩じ、聖宗即位す。乃るに宋史本紀竟に載せず。東軒筆錄に「王曾三元と爲り、劉子儀語るに『一生の喫著盡きず。』を以っし、曾『志は温飽在らず。』を以て對ふ。」と。此れ見る可し其の人品素より定まるを。而れども曾傳に之無し。范文正其の子純仁を遣はし南歸せしむるに、純仁石曼卿の喪未だ葬られざるを見、遂に載す所の麥四十斛を以て舟を連ね之に與へ、其の葬費を助く。此れも亦た其の高誼を見る可し。而れども純仁傳に之無し。蔡襄泉州に在り、密かに雲龍の團茶を新造し進上す。歐陽修之を聞きて曰く「君謨は士人なるも亦た復た此れを爲るや。」と。襄傳亦た載せず。朱子語類に「蘇過は梁師成の妻の爲に持服す。」と。過傳亦た載せず。名臣言行錄に「狄青の儂智高を討つや、賓州に至り夜に將吏と宴す。青は忽ち起ちて衣を更へ、親吏に命じて令を傳へ酒を勧めしむ。青已に潜かに崑崙關に出でて賊を破る。」と。此の事青傳亦た載せず。俞文豹の清夜錄に「靖康の變、上皇將に金軍に赴かんとし、中書舍人の姜堯臣往くべからざるを極諫し、番使骨朵を以て之を撃ちて死す。」と。曹助の北狩錄に四太子王婉容を粘罕の子の婦と爲さんことを求め、婉容自刎して死す。」と。此の一事は必ず宜しく載すべき所の者なり。而るに列傳皆之無し。蜀賊王均の亂、之を討平する者は楊懷忠の功多きに居る。乃るに傳を立つるを爲さず。僅かに雷有終傳に於いて附見す。張盪之傳に「其の父泌自ら傳有り。」と謂ふ。而るに列傳に竝して張泌無し。湧幢小品に「徽宗五月五日を以て生まれ、俗忌を以ての故に壽辰を改め十月十日と爲す。」と謂ふ。而るに本紀亦た載せず。錢氏私誌に「秦州の徐神翁に道術有あり、蔡京常に問ふに國運を以てす。神翁曰く『天方に許多の魔君を遣はし世界を壞たんと作す。太師も亦た是の一箇なり。』と。又た哲宗使を遣はし後嗣を以て問と爲す。神翁『吉人』の二字を書し以て達す。後に徽宗登極し、乃ち御名の佶字に即ふを知るなり。」と。此れ宜しく方技傳に入るべし。而るに方技亦た載せず。

【語注】

○東軒筆錄に：—『東軒筆錄』は北宋の魏泰の撰。太祖より神宗朝の事蹟を記す。十五卷、續錄一卷。その卷十四に「王沂公會青州發解、及南省・程試皆爲首冠。中山劉子儀爲翰林學士、戲語之曰『狀元試三場、一生喫着不盡。』沂公正色答曰『曾平生之志不在溫飽。』」と有る。○范文正其の：—范文正は范仲淹。この故事典據未詳。○蔡襄泉州に：—晁公武『郡齋讀書志』卷十二、雜家類に『試茶錄』二卷を著録し「右皇朝蔡襄君謨撰。襄、皇祐中修注。仁宗嘗面諭云『昨卿所進龍茶甚精。』襄退而記其烹試之法、成書二卷、進禦。世傳歐公聞君謨進小團茶、驚曰『君謨士人、何故如此。』」と有る。○朱子語類に：—『朱子語類』卷第一百三十、本朝四、自熙寧至靖康用人に「蘇東坡子過・范淳夫子溫、皆出入梁師成之門、以父事之。然以其父名在籍中、亦不得官職。師成自謂東坡遺腹子、待叔黨如親兄弟、論宅庫云『蘇學士使一萬貫以下、不須覆。』叔黨緣是多散金、卒喪其身。又有某人亦以父事師成。師成妻死、溫與過當以母禮喪之、方疑忌某人。不得已衰絰而往、則某人先衰絰在帷下矣。」と有る。○名臣言行錄に：—名臣言行錄は朱熹の『五朝名臣言行錄』。卷八に、『夢溪筆談』卷十三、權智の狄青爲樞密副使宣撫廣西の條、及び『東軒筆錄』卷四の狄青之征儂智高也の條を引き、二書の記述に異同が有るが、趙翼の引用は兩者を折衷したものになっている。○俞文豹の清に：—『清夜錄』一卷。『五朝小説』等に收む。該當の文は靖康元年冬都城受圍の條に見える。また同條に下文の王婉容自刎の事と楊若水上書の事が併記され、「三人姓名不見於史傳、而見於曹勛北狩錄。故表而出之。」と有る。○曹勛の北狩に：—北狩錄は『北狩錄見聞錄』。一卷。「靖康二年四月初一日」二太子面請王婉容位下帝姬、與尼雅蒲次子作婦。許之。」と有るが自刎の事は記されていない。宋の徐夢莘撰『三朝北盟會編』卷第八十九、靖康中軼六十四所引の『北狩聞見錄』も同じ。○蜀賊王均の：—『宋史』卷二百七十八、列傳第三十七、雷有終傳。○張昱之傳に：—『宋史』卷三百三、列傳第六十二、張昱之傳。但し宋史は父の名を「祕」に作る。なお『宋史』藝文志二、史類一、正史類に「張泌漢書刊誤一卷」が著録されている。『江表志』に見える南唐の張泌か。○湧幢小品に：—明の朱國禎『湧幢小品』卷之十五、月忌の條に見え

る。○錢氏私誌に：―『錢氏私誌』は宋の錢惟演の撰。一卷。今蔡京の故事を見るも吉人の故事は見られず。吉人の故事は宋の何遠『春渚紀聞』巻一、雜記一、祐陵符兆の條に見える。

【現代語譯】

『宋史』は卷帙がとても多いといっても、事跡にまた取りこぼしたものが多し。太宗の雍熙元年は、遼の景宗の乾亨四年である。この年景宗が崩御し、聖宗が即位した。それなのに『宋史』本紀はついで載せていない。『東軒筆錄』に「王曾が三元となったとき、劉子儀が『一生生活するのに困らないでしょう。』と話したところ、王曾は『私の志は衣食になどない。』と答えた。」とある。これはその人に備わっている品格がこのようなところ、王曾は『私の志は衣食にかかる。しかしながら王曾傳にこのことは書かれていない。范仲淹は息子である純仁を遣はし南に歸そうとしたが、純仁は石曼卿の葬儀でまだ埋葬されていないのを見て、そこで載せている麥四十斛を舟を連ねて石曼卿の遺族に與え、葬費を助けた。これもまた范純仁の高邁な友誼がわかる。けれども范純仁傳にこのことは書かれていない。蔡襄は泉州に居て、密かに雲龍の團茶を新しく造り進上した。歐陽修はこれを見て、「君謨は士人であるのに、なんとまあよく團茶をつくったものだ。」といった。蔡襄傳もまた載せていない。『朱子語類』に、「蘇過は梁師成の妻の爲に喪に服した。」とあるが、蘇過傳にはまた載せていない。『名臣言行錄』に、「狄青は儂智高を討つ時、賓州にやってきくと夜に他の武將や官吏と宴會を開いた。狄青はいつのまにかに席を立ち着替えると、親しい臣下に命じて客に酒を勧めさせておき（その間に）狄青は潜かに昆侖關に出て賊を打ち破った。」とある。この事も狄青傳には載せていない。俞文豹の『清夜錄』に、「靖康の變にあたり、上皇は金軍に赴こうとしたが、中書舎人の姜堯臣は、往くべきではないと厳しく諫め、金の使者は骨朵（棒状の武器）で姜堯臣を撃ち殺した。」とある。曹勛の『北狩録』に、「四太子は王婉容を黏罕の息子

の妻になるように求めたが、王婉容は自ら首を切って死んだ。」とある。この二事は必ず載せるべきことである。しかしながら列傳にはいずれも書かれていない。蜀賊の王均の亂にあたり、王均を討平したのは、楊懷忠の功が大部分を占めていた。しかしながら彼の傳を立てていない。僅かに雷有終傳に付記されているだけである。張昱之傳に「父の張泌には別に傳が有る。」と言っている。しかし列傳にはまったく張泌の傳が無い。『湧幢小品』に、「徽宗は五月五日に生まれ、世俗の忌むところであるが故に誕生日をを改めて十月十日とした。」と言っている。しかし本紀にはまた載せていない。『錢氏私誌』に「秦州の徐神翁は道術を心得ていて、蔡京はいつも國家の命運を問いかけていた。徐神翁は『天はまさしく數多の魔君を遣わし世界を破壊しようとしている。太師もまた是の魔君の一人である。』と言った。また哲宗は使者を遣わし世繼ぎについて質問をした。徐神翁は『吉人』の二字を書き記し、それを使者に持たせた。後に徽宗が即位し、そこで御名の佶字が『吉人』の二字にのっとっていることがわかった。」とある。これは方技傳に入れるべきことである。しかしながら方技傳はまた載せていない。

(小澤さやか・栗栖亞矢子)

【原文】

13 宋史五

宋史又有是非失當者南唐清淮節度使劉仁瞻死守壽州周世宗攻之不拔其子崇諫謀出降仁瞻斬之以徇及仁瞻病垂死副使孫羽詐爲仁瞻書以降是日仁瞻死則仁瞻實未降也歐公五代史所以特列之於死節傳中乃宋史袁彥傳有劉仁瞻降之語張保續傳亦曰劉仁瞻率將卒出降何其厚誣古人若此蔡確車蓋亭詩引唐郝處俊事以武后比宣仁太后事發將謫嶺表蘇軾傳謂軾奏請哲宗降手詔欲深治確而太后降手詔貨之則仁孝兩得下又云太后心善軾言而不能按宣仁謂大臣曰帝即位乃以子繼父有何間言而確自

謂有定策功規爲異日眩惑地吾不忍明言姑托訕上爲名以逐之耳此正見宣仁防患未然去邪勿疑之明決而軾傳謂太后心善其言不能一似軾之言爲是而太后不聽者其是非不亦謬乎

【書き下し】

13 宋史五

宋史に又た是非の失當せる者有り。南唐の清淮節度使劉仁贍壽州を死守す。周の世宗之を攻めて抜かず。其の子の崇諫めて出でて降るを謀る。仁贍之を斬り以て狗ふ。仁贍病みて死に垂とするに及び、副使の孫羽詐りて仁贍の書を爲りて以て降る。是の日仁贍死す。則ち仁贍、實は未だ降らざるなり。歐公五代史特に之を死節傳中に列す所以なり。乃るに宋史袁彥傳に「劉仁贍降る」の語有り。張保續傳に亦た曰ふ、「劉仁贍將卒を率ひ出でて降る。」と。何ぞ其れ厚く古人を誣ふること此くの若きや。蔡確は車蓋亭詩に唐の郝處俊の事を引き武后を以て宣仁太后に比す。事發れ將に嶺表に謫せられんとす。蘇軾傳に謂ふ、「軾奏して請ふ、『哲宗手詔を降し深く確を治せんと欲し、而して太后手詔を降し之を貨さば則ち仁孝兩得す。』」と。下に又た云ふ、「太后心に軾の言を善しとすれども、用ふること能はず。」と。按ずるに、宣仁大臣に謂ひて曰はく、「帝の位に即くや、乃ち子を以て父を繼ぐ、何の閒言か有る。而るに確自ら定策の功有りと謂ふ。異日眩惑の地と爲るを規さんとするも、吾れ明言するに忍びず。姑く上を訕るに托して名と爲し以て之を逐ふのみ。」と。此れ正に宣仁の患を未然に防ぎ邪を去るに疑ふこと勿きの明決なるを見す。而るに軾傳に、「太后心に其の言を善しとするも用ふる能はず。」と謂へば、一ち軾の言是爲るも、而るに太后聽かざる者の似し。其の是非亦た謬ひならずや。

【語注】

○劉仁贍降る…『宋史』卷二百六十一、列傳第二十、袁彥傳。○劉仁贍將卒…『宋史』卷二百七十四、列傳第三十三、張保續傳。○蔡確は車蓋…『宋史』卷四百七十一、列傳第二百三十、蔡確傳。○軾奏して請…『宋史』卷三百三十八、列傳第九十七、蘇軾傳。○帝の位に即…『宋史』卷二百四十二、列傳第一、英宗宣仁聖烈高皇后傳。

【現代語譯】

宋史には他にも正誤の適當でないところがある。南唐の清淮節度使の劉仁贍は壽州を死守した。周の世宗は壽州を攻めたが攻め落とせなかった。仁贍の子の崇が仁贍を諫めて、城を出て降服することを進言した。仁贍は崇を斬って見せしめとした。仁贍が病にかかって今にも死にそうなとき、副使の孫羽は仁贍の書を偽造してそれを持って降伏した。その日に仁贍は死んだ。つまり仁贍は実際には降伏していないのである。歐陽脩の『新五代史』は、こういう理由で死節傳にこのことを記したのである。それなのに『宋史』袁彥傳に「劉仁贍は降伏した。」という箇所がある。張保續傳にもまた、「劉仁贍は將兵を率いて城を出て降伏した。」とある。どうしてこれほどまでに死んだ人のことをこのように貶めるのだろうか。蔡確は車蓋亭詩に唐の郝處俊の事を引いて、宣仁太后を則天武后に比喩した。その事が發覺し、蔡確は嶺表に左遷されそうになった。蘇軾傳には、「蘇軾は上奏して『哲宗陛下が直筆の詔を下し、蔡確を重く處罰しようとして、その上で太后が直筆の詔を下され、彼を許そうとなさるならば、これは仁・孝の兩方を得る行いです。』と請い願った。」とある。その後にもまた、「太后は心から蘇軾の提言を良いと思ったが、結局用いることはできなかった。」と書かれている。考えてみるに、宣仁太后は大臣に「皇帝がその位に就いたのは、子が父を繼いだのであって、そこに何の間言があるのか。しかし蔡確は自分から『私は陛下を帝位につけた功があります。』と言った。後日に混亂を招くよ

うな餘地を正そうとするにも、私にははつきり言うことができなかつた。そこでしばし私を誹謗したことにこと寄せて、それを建前として左遷させたのだ。」と言つた。(このことは)まさしく宣仁太后の、災いを未然に防ぎ不正を除き去る英斷であつたことは全く疑いのないことである。それなのに蘇軾傳に「太后は心からその提言を良いと思つたが、結局用いることはできなかつた。」とあるのは、とりもなおさず蘇軾の言葉は正しいけれども、太后は聞き入れなかつたかのようなのである。その正誤はなんと違つてゐることではないか。

(佐藤 良)

【原文】

14 宋史六

王明清揮塵錄及王銍默記皆言滁州之戰太祖兵已敗訪村民知有趙學究教授鄉塾多奇計乃叩之即趙普也普爲畫計太祖即用普鄉導乘夜取道清流關側蘆子乳浮西澗入北門直擣郡治皇甫暉方坐帳中治軍書聞變即躍馬奔東郊太祖追及一劍揮之人馬俱墜遂就擒姚鳳卽以其衆降今本紀云暉鳳兵十五萬塞滁州太祖擊走之追至城下暉曰願成列以決勝負太祖笑而許之暉整陣出太祖擁馬項直入手刃暉中腦并擒鳳與揮塵錄等所記不同獨醒雜志方臘既敗獨與千餘人入剡溪洞死拒董貫不能誰何乃命部將僞爲朝廷招安者誘之以官旣出遂繫之父子皆檻送京師伏誅而宋史韓世忠傳謂臘入青溪洞世忠挺戈獨入擒之以出蓋據清溪志所記也而與獨醒志互異又紹熙行禮記孝宗崩光宗以疾不過宮成服中外洵洵宰相留正久去位樞密趙汝愚計無所出宗室趙彥逾責以同姓之卿不得坐視汝愚曰奈何事急持刀向朝天門叫幾聲自割殺耳彥逾曰無益也乃爲畫計請於太皇太后以嘉王擴卽位〔寧宗〕而尊光宗爲太上皇使韓侂胄等共成其事是首謀乃彥逾也今宋史彥逾及汝愚傳謂汝愚謀立嘉王卽位欲倚殿帥郭杲爲用以告彥逾彥逾嘗有德於杲遂承命以汝愚謀告杲杲乃領兵衛寧宗卽位是此謀本出汝愚與紹熙行禮記又不同按葉適傳時中外洵洵趙汝愚計無所出適責知閣門事蔡必勝以不得坐視蔡乃與官贊舍人傅昌朝知內侍省關禮知閣門事韓侂胄三人定議適亟白汝愚汝愚

乃遣侂胄關禮以內禪事奏太皇太后明日因禪祭立嘉王卽位是此謀本非始於汝愚亦可見也又尤延之傳朝廷定高宗廟配享洪邁請用呂頤浩韓世忠趙鼎張浚而楊萬里亦言張浚當配食按誠齋揮塵錄謂洪景盧常以浚殺曲端一事輟其配享是邁乃輟浚配享者而史則云邁請以浚配享何又抵牾若是耶按楊萬里傳高宗崩洪邁不俟集議配享獨以呂頤浩等姓名上萬里疏誡之力言張浚當預據此則景盧本未以浚入配享尤延之傳所云或係張浚也又文天祥傳元主欲降天祥天祥不肯曰不得已以黃冠侍樽俎可也此乃襲野史之訛按鄭所南心史有人告元主云漢人欲挾文丞相擁德祐嗣君爲主元主召天祥面詰天祥怒罵但求刀下死元主猶欲釋之俾爲僧或爲道士又欲縱之還鄉天祥痛罵不止元主始殺之是黃冠歸故鄉乃元主之意非天祥意也而宋史移作天祥語豈不厚誣耶

【書き下し】

14 宋史六

王明清の揮塵錄及び王銍の默記は皆、「滁州の戦や、太祖の兵已に敗る。村民に訪ね趙學究なるもの有り郷塾に教授し、奇計多きを知り、乃ち之を叩く。即ち趙普なり。普爲に畫計し、太祖即ち普を用ひ郷導せしめ、夜に乗じて道を清流關の側蘆子扎に取り、西澗に浮かび北門より入り、直ちに郡治を擣つ。皇甫暉は方に帳中に坐し軍書を治む。變を聞き即ち馬を踊らし東郊に奔る。太祖追及し一劍之を揮はば人馬俱に墜ち、遂に擒に就く。姚鳳即ち其の衆を以て降る。」と言ふ。今、本紀は「暉・鳳の兵十五萬滁州を塞ぎ、太祖之を撃走し、追つて城下に至る。暉曰く、『願くば列を成し以て勝負を決せん。』と。太祖笑ひて之を許す。暉陣を整へ出で、太祖馬項を擁し直入し、手づから暉に刃し腦に中て、并びに鳳を擒ふ。」と云ふ。揮塵錄等と記す所同じからず。獨醒雜志に、「方臘既に敗れ獨ち千餘人と剡溪洞に入り、死拒す。童貫誰何する能はず。乃ち部將に命じ僞りて朝廷の招安の者と爲さしめ之を誘ふに官を以てす。既に出で遂に之を繫ぐ。父子皆京師に檻送せられ誅に伏す。」と。而るに宋史韓世忠傳に、「臘の青溪洞に入るや、世忠戈を挺し獨り

入り、之を擒へ以て出づ。」と謂ふ。蓋し清溪志の記す所に據るなり。而ち獨醒志と互ひに異にす。又紹熙行禮記に、「孝宗崩じ、光宗疾を以て宮を過ぎりて服を成さず、中外洵洵とす。宰相留正久（しんきう）に位を去り、樞密の趙汝愚計の出づる所無し。宗室の趙彥逾責むるに同姓の卿坐視するを得ざるを以てす。汝愚曰く、『奈何せん事は急なり。刀を持ち朝天門に向かひ幾聲かを叫び自ら割殺するのみ。』」と。彥逾曰く、『無益なり。』と。乃ち畫計を爲し、太皇太后に嘉王擴（くわく）「寧宗なり。」を以て即位せしめ、而して光宗を尊び太上皇と爲すを請ふ。韓侂胄等をして共に其の事を成さしむ。」と。是れ首謀は乃ち彥逾なり。今、宋史彥逾及び汝愚傳に、「汝愚謀りて嘉王を立て即位せしめんとし、殿帥の郭杲に倚り用を爲さんと欲し、以て彥逾に告ぐ。彥逾嘗て杲に徳すること有り、遂に命を承け汝愚の謀を以て杲に告ぐ。杲乃ち兵を領し、寧宗を衛りて即位せしむ。」と謂ふ。是れ此の謀本より汝愚より出づ。紹熙行禮記と又同じからず。葉適傳を按ずれば、「時に中外洵洵とし、趙汝愚計の出づる所無く、適知閣門事の蔡必勝を責むるに坐視するを得ざるを以てす。蔡乃ち宣贊舍人の傅昌朝・知内侍省の關禮・知閣門事の韓侂胄の三人と議を定む。適亟かに汝愚に白げ、汝愚乃ち侂胄・關禮をして内禪の事を以て太皇太后に奏せしむ。明日、禪祭に因りて嘉王を立て即位せしむ。」と。是れ此の謀本より汝愚に始まるに非ざること亦た見る可きなり。又尤延之傳に、「朝廷高宗の廟の配享を定めんとするや、洪邁 呂頤浩・韓世忠・趙鼎・張浚を用ふるを請ひ、而して楊萬里も亦た張浚は當に配食する可しと言ふ。」と。按ずるに誠齋揮麈錄に、「洪景廬常に浚の曲端を殺すの一事を以て其の配享を輟せんとす。」と謂ふ。是れ邁は乃ち浚の配享を輟せんとする者なり。而るに史は則ち「邁浚を以て配享するを請ふ。」と云ふ。何ぞ又抵牾することは是の若きか。楊萬里傳を按ずるに、「高宗崩じ、洪邁配享を集議するを俟たず、獨り呂頤浩等の姓名を以て上る。萬里疏して之を詆り力めて『張浚も當に預るべし。』」と言ふ、と。此に據れば則ち、景廬は本より未だ浚を以て配享に入れず、尤延之傳の云ふ所は或いは張浚に係るなり。又、文天祥傳に「元主天祥を降さんと欲するも、天祥肯んぜずして曰く、『已むを得ざれば、黃冠

を以て樽俎に侍るは可なり。』と。」と。此れ乃ち野史の訛を襲ふ。鄭所南の心史を按ずるに、「人元主に告げて、『漢人文丞相を挟み徳祐の嗣君を擁し主と爲さんと欲す。』と云ふ。元主天祥を召し面詰するも、天祥怒罵し、但だ刀下の死を求むるのみ。元主猶ほ之を釋して。僧と爲し、或いは道士と爲さしめんと欲し、又た之を縦ち郷に還さんと欲す。天祥痛罵すること止まず。元主始めて之を殺す。」と。是れ「黃冠して故郷に歸る」は乃ち元主の意にして、天祥の意に非ざるなり。而るに宋史は移して天祥の語と作す。豈に厚誣ならずや。

【語注】

○王明清の揮……王明清『揮塵後錄』卷一に「當其始也、趙韓王教村童於山下、始與太祖父際、用其計畫。俾爲鄉導、提孤軍、乘月夜、指縱銜枚、取道於清流關側蘆子孔、浮西澗、入自北門、直搗郡治。皇甫暉方坐帳中燕勞將士、養銳待戰、倉黃聞變、初不測我師之多寡、躍其愛馬號千里電奔東郊。太祖追及於河梁、以劍揮之、人馬俱墜橋下、暉遂擒。姚鳳卽以其衆解甲請降。」と有る。○王銍の默記……王銍『默記』上卷に「藝祖仕周世宗、功業初未大顯。會世宗親征淮南、駐蹕正陽、攻壽陽劉仁贍未下、而藝祖分兵取滁州。距壽州四程皆大山、至清流關而止。關去州三十裏則平川、而西澗又在滁城之西也。是時、江南李景據一方、國力全盛。聞世宗親至淮上、而滁州其控扼、且援壽州、命大將皇甫暉、監軍姚鳳提兵十萬扼其地。太祖以周軍數千與暉遇於清流關隘路、周師大敗。暉整全師入憩滁州城下、令翼日再出。太祖兵再聚於關下、且虞暉兵再至、問諸村人、雲有鎮州趙學究在村中教學、多智計、村民有爭訟者、多詣以決曲直。太祖微服往訪之。學究者固知爲趙點檢也。迎見加禮。太祖再三叩之、學究曰『皇甫暉威名冠南北、太尉以爲與己如何。』曰『非其敵也。』學究曰『然彼之兵勢與己如何。』曰『非其比也。』學究曰『然兩軍之勝負如何。』曰『彼方勝、我已敗、畏其兵出、所以問計於君也。』學究曰『然且使彼來日整軍、再乘勝而出、我師絕歸路、不復有噍類矣。』太祖曰『當復奈

何。』學究曰『我有奇計、所謂因敗爲勝、轉禍爲福者。今關下有徑路、人無行者、雖暉軍亦不知之、乃山之背也、可以直抵城下。方阻西澗水大漲之時、彼必謂我既敗之後、無敢躡其後者。誠能由山背小路、率衆浮西澗水至城下、斬關而入、彼方戰勝而驕、解甲休衆、必不爲備。可以得誌。所謂兵貴神速、出其不意。若彼來日整軍而出、不可爲矣。』太祖大喜、且命學究指其路。學究亦不辭、而遣人前導。卽下令誓師、夜出小路亟行。三軍跨馬浮西澗以迫城、暉果不爲備、奪門以入。旣入、暉始聞之、旋率親兵擐甲與太祖巷戰、三縱而三擒之。旣主帥被擒、城中賊謂周師大兵且至。』と有る。○本紀は、暉……『宋史』卷一 太祖本紀一に「南唐節度皇甫暉・姚鳳衆號十五萬、塞清流關、擊走之。追至城下、暉曰『人各爲其主、願成列以決勝負。』。太祖笑而許之。暉整陣出、太祖擁馬項直入、手刃暉中腦、并姚鳳禽之。』と有る。○『獨醒雜志』に……『曾敏行『獨醒雜志』卷七に「後臘以食少人衆、勢稍窘促、遂獨從千餘人入剡溪洞、死拒不出、童貫不能誰何。乃命部將僞爲朝廷招降者、誘之以官。旣出、則繫之、父子皆檻送京師、戮死於市、餘黨遂平。』と有る。○宋史韓世忠……『宋史』卷三百六十四 列傳第一百二十三 韓世忠傳に「時有詔能得臘首者、授兩鎮節鉞。世忠窮追至睦州清溪峒、賊深據巖屋爲三窟、諸將繼至、莫知所入。世忠潛行溪谷、問野婦得徑、卽挺身仗戈直前、渡險數里、擣其穴、格殺數十人、禽臘以出。辛興宗領兵截峒口、掠其俘爲己功、故賞不及世忠。』と有る。○宋史彥逾及……『宋史』卷二百四十七 列傳第六 宗室四 趙彥逾傳に「孝宗崩、光宗疾、不能持喪。樞密趙汝愚議請立嘉王爲皇帝、欲倚殿帥郭杲爲用、遣中郎將范任告之、杲不應。時中外洶洶、彥逾見汝愚、對泣、汝愚密告以翊戴之議。彥逾大喜、力贊其決。郭杲嘗被誣、彥逾爲白于帝、杲德之、遂馳告杲曰『彥逾與樞密第能謀之耳。太尉爲國虎臣、當任其責。』。杲未及對、彥逾急責之、杲許諾、遂領兵爲衛。寧宗卽位、汝愚謂彥逾曰『我輩宗臣、不當言功。』と有る。また、『宋史』卷三百九十二 列傳第一百五十一 趙汝愚傳に「會工部尚書趙彥逾至私第、語及國事、汝愚泣、彥逾亦泣、汝愚因微及與子意、彥逾喜。汝愚知彥逾善杲、因繆曰『郭杲儻不同、奈何。』。彥逾曰『某當任之。』。約明乃復命。汝愚曰『此大事已出諸口、豈容有所俟

乎。汝愚不敢入私室、退坐屏後、以待彥逾之至。有頃、彥逾至、議遂定。明日、正以五更肩輿出城去、人心益搖、汝愚處之恬然。自吳璠之議不諧、汝愚與徐誼・葉適謀可以白意於慈福宮者、乃遣韓度胄以內禪之意請于憲聖。侂胄因所善內侍張宗尹以奏、不獲命、明日往、又不獲命。侂胄逡巡將退、重華宮提舉關禮見而問之、侂胄具述汝愚意。禮令少俟、入見憲聖而泣。憲聖問故、禮曰『聖人讀書萬卷、亦嘗見有如此時而保無亂者乎。』憲聖曰『此非汝所知。』禮曰『此事人人知之、今丞相已去、所賴者趙知院、且夕亦去矣。』言與淚俱。憲聖驚曰『知院同姓、事體與他人異、乃亦去乎。』禮曰『知院未去、非但以同姓故、以太皇太后爲可恃耳。今定大計而不獲命、勢不得不去。去、將如天下何。願聖人三思。』憲聖問侂胄安在、禮曰『臣已留其俟命。』憲聖曰『事順則可、令諭好爲之。』禮報侂胄、且云『來早太皇太后於壽皇梓宮前垂簾引執政。』侂胄復命、汝愚始以其事語陳騫・余端禮、使郭杲及步帥閻仲夜以兵衛南北內、禮使其姻黨宣贊舍人傅昌朝密製黃袍。是日、嘉王謁告不入臨、汝愚曰『禪祭重事、王不可不出。』翌日禪祭、羣臣入、王亦入。汝愚率百官詣大行前、憲聖垂簾、汝愚率同列再拜、奏『皇帝疾、未能執喪、臣等乞立皇子嘉王爲太子、以繫人心。皇帝批出有甚好二字、繼有念欲退閑之語、取太皇太后處分。』憲聖曰『既有御筆、相公當奉行。』汝愚曰『茲事重大、播之天下、書之史冊、須議一指揮。』憲聖允諾。汝愚袖出所擬太皇太后指揮以進、云『皇帝以疾至今未能執喪、曾有御筆、欲自退閑。皇子嘉王擴可卽皇帝位。尊皇帝爲太上皇帝、皇后爲太上皇后。』憲聖覽畢曰『甚善。』汝愚奏『自今臣等有合奏事、當取嗣君處分。然恐兩宮父子間有難處者、須煩太皇太后主張。』又奏『上皇疾未平、驟聞此事、不無驚疑、乞令都知楊舜卿提舉本宮、任其責。』遂召舜卿至簾前、面諭之。憲聖乃命皇子卽位。皇子固辭曰『恐負不孝名。』汝愚奏『天子當以安社稷、定國家爲孝。今中外人人憂亂、萬一變生、置太上皇何地。』衆扶入素幄、披黃袍、方却立未坐、汝愚率同列再拜。寧宗詣几筵殿、哭盡哀。須臾、立仗訖、催百官班。帝衰服出就重華殿東廡素幄立、內侍扶掖乃坐。百官起居訖、行禪祭禮。汝愚卽喪次、召還留正長百僚、命朱熹待制經筵、悉收召士君子之在外者。」と有る。○葉適傳を按……『宋

史』卷四百三十四 列傳第一百九十三 儒林四 葉適傳に「及孝宗不豫、羣臣至號泣攀裾以請、帝竟不往。適責宰相留止曰『上有疾明甚。父子相見、當俟疾瘳。公不播告、使臣下輕議君父可乎。』未幾、孝宗崩、光宗不能執喪。軍士籍籍有語、變且不測。適又告正曰『上疾而不執喪、將何辭以謝天下。今嘉王長、若預建參決、則疑誘釋矣。』宰執用其言、同入奏立嘉王爲皇太子、帝許之。俄得御批、有歷事歲久、念欲退閑之語、正懼而去、人心愈搖。知樞密院趙汝愚憂危不知所出、適告知閣門事蔡必勝曰『國事至此、子爲近臣、庸坐視乎。』蔡許諾、與宣贊舍人傅昌朝・知內侍省關禮、知閣門事韓侂胄三人定計。侂胄、太皇太后甥也。會慈福宮提點張宗尹過侂胄、侂胄覘其意以告必勝。適得之、卽亟白汝愚。汝愚請必勝議事、遂遣侂胄因張宗尹、關禮以內禪議奏太皇太后、且請垂簾、許之、計遂定。翌日禪祭、太皇太后臨朝、嘉王卽皇帝位、親行祭禮、百官班賀、中外晏然。凡表奏皆汝愚與適裁定。」と有る。○誠齋揮塵錄に：「楊萬里『誠齋揮塵錄』に見えず。○楊萬里傳を：「『宋史』卷四百三十三 列傳第一百九十二 儒林三 楊萬里傳に「高宗未葬、翰林學士洪邁不俟集議、配饗獨以呂頤浩等姓名上。萬里上疏詆之、力言張浚當預、且謂邁無異指鹿爲馬。」と有る。○文天祥傳に：「『宋史』卷四百十八 列傳第一百七十七 文天祥傳に「時世祖皇帝多求才南官、王積翁言『南人無如天祥者。』遂遣積翁諭旨、天祥曰『國亡、吾分一死矣。儻緣寬假、得以黃冠歸故鄉、他日以方外備顧問、可也。若遽官之、非直亡國之大夫不可與圖存、舉其平生而盡棄之、將焉用我。』積翁欲合宋官謝昌元等十人請釋天祥爲道士、留夢炎不可曰『天祥出、復號召江南、置吾十人於何地。』事遂已。」と有る。

【現代語譯】

王明清の『揮塵錄』と王銍の『默記』は兩書とも「滁州の戦いで、太祖の兵はすでに敗れた。村民に訪ねると趙學究なる者が郷塾に教授しており、奇計を多く出すことを知り、そこで趙學究の家の門を叩いた。それが趙普である。趙普は

太祖の爲に謀を出し、太祖はすぐに趙普に道を先導させ、夜陰に乗じて進路を清流關の側廬子宐に取り、西澗を船で渡り、北門より侵入し、すぐ郡の治所を攻撃した。皇甫暉はその時帳の中に坐しており、軍の書状を整理していた。變事が起こったことを聞きすぐに馬を蹕らして東郊に逃走した。太祖が追撃し劍を揮へば人馬ともに地に墜ち、ついに捕らわれた。姚鳳はただちにその軍衆を率い降った。」と言っている。今、『宋史』の本紀は「皇甫暉と姚鳳の兵十五萬が滁州を封鎖し、太祖は彼らを攻撃し、追走して城下に至った。皇甫暉は『願くば隊列をつくり、そして勝負を決しよう。』と言った。太祖は笑ってそれを許した。皇甫暉が陣列を整えて出撃し、太祖は馬の項を抱え直進し、その手で皇甫暉に刃を振るい腦天に當て、ともに姚鳳をも捉えた。」としている。『揮塵錄』等と記述が同じではない。『獨醒雜志』に、「方臘はすでに敗れると千餘人と剡溪洞に入り、決死で拒戦していた。童貫は姓名を問うことすらできなかった。そこで部將に命じ朝廷の招安の者と偽装させ方臘を官職で誘惑した。剡溪洞から方臘が出てくると捕らえた。その父子は皆京師に檻送させられ誅殺された」とある。けれども『宋史』韓世忠傳に「方臘が青溪洞に入ると、韓世忠は戈を携え獨り洞に入り、方臘を捕らえて出てきた。」としている。恐らく『清溪志』の記述に據ったのであろう。そして『獨醒志』とお互いに異なる。又『紹熙行禮記』に「孝宗が崩御し、光宗は病を理由に重華宮に行つて服喪を成さなかつたので、朝廷の内外は鬱々としていた。宰相の留正はついに位を去り、樞密使の趙汝愚はなんら策を出せないでいた。宗室の趙彥逾は『同姓の公卿が坐視してはいけない。』と責めた。趙汝愚は『どうしたとして事は切迫している。刀を持って朝天門に向かい幾らか聲をあげ自刃するだけだ。』と言った。趙彥逾は『無益だ。』と言った。そこで策謀を計り、太皇太后に嘉王の趙擴「寧宗である。」を即位させ、そして光宗を尊び太上皇とすることを請うた。韓侂胄等にもその事を成就させた」とある。これは首謀者は趙彥逾である。今、『宋史』趙彥逾と趙汝愚傳に「趙汝愚は謀をなし嘉王を立てて即位させようとして、殿帥の郭杲を頼んで謀を爲そうと思ひ、そこで趙彥逾に（そのことを）告げた。趙彥逾はか

つて郭杲に恩を賣っていたので、ついにその命を承けて趙汝愚の謀を郭杲に告げた。郭杲はそこで衛兵を領し、寧宗は即位した」としている。これはこの謀は本より趙汝愚より出ている。『紹熙行禮記』とまた同じではない。葉適傳を見れば、「その時朝廷の内外は鬱々としており、趙汝愚はなんら策を出せずにおり、葉適は知閣門事の蔡必勝を『坐視してはならない。』と責めた。蔡必勝はそこで宣贊舍人の傅昌朝・知内侍省の關禮・知閣門事の韓侂胄の三人と議論を定めた。葉適はすみやかに趙汝愚に告げ、汝愚はそこで韓侂胄・關禮に内禪の事を太皇太后に奏上させた。明日、禪祭にかこつけて嘉王を立てて帝位に即かせた。」としている。これはこの謀が本より趙汝愚に端を發したことはないことをまた見ることが出来る。また尤延之傳に、「朝廷が高宗の廟の配享を定めようとした時、洪邁は呂頤浩・韓世忠・趙鼎・張浚を配享に入れるよう請い、そして楊萬里もまた『張浚は當然配食するべきである。』と言った。」とある。思うに『誠齋揮塵錄』に、「洪景廬は常に張浚が曲端を殺したことの一事を取り上げその配享に入れることを止めさせようとした。」とある。これは洪邁はつまるところ張浚の配享を止めさせようとした者である。けれども『宋史』は「洪邁は張浚を配享に入れることを請うた。」としている。なぜまたここまで乖離しているのか。楊萬里傳を見れば、「高宗が崩御し、洪邁は配享のことを集議して定めることを待たないで、獨斷で呂頤浩等の姓名を奏上した。楊萬里は上疏してこのことを詆って努めて『張浚も當然配享に預るべきである。』と言った。」とある。これに據れば、洪邁はもとも張浚を配享に入れておらず、尤延之傳の言う張浚はあるいは張浚のことかもしれない。また、文天祥傳に「元主は文天祥を降らせたいと思つたが、文天祥は首を縦に振らず『やむをえないのであれば、黃冠をかぶり道士となつて世俗から離れて生きていくのもいいであろう。』と言つた。」とある。これは野史の誤りを踏襲してしまつている。鄭所南の『心史』を見れば、「ある人が元主に告げて、『漢人は文丞相を擔ぎ恭帝の後嗣を擁立して君主と爲そうとしている。』と言つた。元主は文天祥を召喚し面と向かつて詰問するも、文天祥は怒つて痛罵し、ただ一刀の下に死を求めただけで

あった。元主はなおも文天祥を釋して僧にさせ、あるいは道士にさせたいと思ひ、また彼を釋放し故郷に還そうかとも思つた。(しかし) 文天祥は痛罵することを止めなかつた。元主は(そこで) はじめて文天祥を殺した。」とある。これは「道士となり故郷に歸る」とは元主の意志であり、文天祥の意志ではない。しかしながら『宋史』は(そのことを) 文天祥の言葉にしてしまつてゐる。なんと酷く貶めることであろうか。

(大兼健寛)

【原文】

15 宋史七

宋史蕪雜最甚卽一史之中亦多有自相矛盾者徽宗內禪一事李綱傳云皇太子爲開封牧綱謂吳敏曰建牧豈非欲委以留守乎然非傳以位號不可敏曰監國可乎綱以肅宗靈武建號不出於明皇使後世惜之爲對明日敏遂以禪位事進說并謂李綱亦有此議是傳位之議本起於綱也而吳敏傳則謂徽宗將內禪蔡攸探知上意引敏入對敏遂并薦綱入見則又似內禪本出於徽宗意也按張端義貴耳錄謂徽宗聞金人破燕夜詔當直學士黃中令草詔罪己并傳位太子明日罪己詔下淵聖登極并記徽宗語謂詔中處分蔡攸盡道不是只傳位一事要靠做他功勞宋史蔡攸傳帝欲內禪親書傳位東宮字授李邦彥邦彥不敢承以付攸攸屬其客吳敏遂定議而李熙靖傳亦載道君皇帝曰外人以內禪爲吳敏功不知乃出自吾意不然言者且滅族矣是則內禪本出自徽宗而李綱傳所云但據靖康傳信錄詮次成篇恐未爲得實也或綱議適與徽宗合遂成此事耶又如靖康圍城之事姚平仲傳謂平仲欲劫營以士卒不得速戰爲言李綱主其議令城外兵俱聽平仲節度遂及於敗是劫營之計李綱實與聞之而綱傳則謂平仲密奏斫營夜半中使傳旨使綱策應則又似綱初未與知者又綱傳紹興二年出知潭州荆湖羣盜不可勝計綱悉蕩平之按是時尚有曹成等據湖湘道賀等州而楊么在洞庭直至五年始滅皆岳飛平之何得盡歸功於綱知潭州之歲也韓世忠固稱名將然其始亦多可議劉光世部將王德殺世忠部將會詔光世移屯世

忠遣兵襲其後并奪建康守府廨事見趙鼎及季陵傳而滕康傳又謂世忠兵奪御器械逼諫臣于死常同亦以此劾其驕狠無忌憚魏玘傳又謂內侍李虞飲世忠于家刀傷弓匠是皆世忠之過而本傳絕不載張浚因李綱誅宋齊愈劾其以私意殺侍從綱遂罷相見於高宗紀及綱傳浚又嘗薦秦檜可任大事見趙鼎傳又嘗與岳飛論呂祉王德鄰瓊兵事不合遂怒飛因解兵奔喪歸浚猶謂其不得併兵以去要君遂命張宗元權其軍事見於高宗紀汪伯彥既貶帝念之浚以伯彥舊嘗引己遂與秦檜援郊祀恩起知宣州見汪伯彥傳陳東伏闕上書黃潛善輩已殺之浚又奏胡程筆削東書欲以布衣挾進退大臣之權遂追勒編置蓋浚乃潛善客而呈則李綱客也事見戴埴麈談乃浚傳於此等處竝無一語惟殺曲端略見傳中而又謂端部將張忠彥降金故下之獄其于鄺瓊之叛又謂遣閒持蠟書遺瓊金人疑遂廢劉豫又幾欲以金人廢豫歸功於浚矣至楊么之擒皆岳飛力也而浚傳中全歸功於浚謂賊二十餘萬相繼降潮寇盡平絕不及飛一字何也何鑄嘗與羅汝楫劾岳飛見汝楫傳鑄又嘗爲秦檜劾王居正爲趙鼎之黨鼎遂奪職奉祠見王居正傳又劾張九成黨趙鼎見張九成傳又劾廖剛與陳淵等相爲朋比見廖剛傳是鑄之姦邪不一而足乃鑄傳竝無一字反云治岳飛獄力辨其冤謂不當無故殺一大將竟似正直者他如文彥博以燈籠錦媚張貴妃見唐介傳而本傳不載建炎元年葉夢得知杭州軍校陳通作亂夢得被執見高宗本紀葉夢得初爲蔡京客京倚爲腹心嘗爲京立元祐黨籍分三等定罪後知應天府以京黨落職見毛注強淵明胡安國等傳而本傳不載呂頤浩引朱勝非以傾秦檜胡安國劾勝非不當復用安國求去檜三上章留之見秦檜傳而安國傳不載李顯忠破宿州私其金帛又與邵宏淵忿爭遂致潰歸見胡銓傳而本傳亦不載岳珂守當塗橫斂百出置貪刻吏開告計之門以罔民而沒其財見徐慶卿傳而本傳亦不載辛棄疾附和韓侂胄開兵端見侂胄傳而本傳亦不載又虞允文傳金主亮南侵王權自和州遁歸詔以李顯忠代權令允文趣顯忠赴權軍允文軍采石權已去顯忠未來我師三五星散解鞍坐道旁允文念坐待顯忠則悞國事遂招諸將勉以忠義諸將皆死戰得大捷明日又敗敵於楊林口顯忠始至是采石之捷顯忠實未嘗與也而顯忠傳則云金主將濟江詔以顯忠代王權命虞允文趣顯忠交軍於是有采石之捷則以此捷分功於顯忠矣顯忠傳又云是時顯忠遣萬人渡江盡復淮西州郡亮切責諸將諸將弑之則并以海陵之弑由於顯忠之復淮西按海陵因采石不得渡卽趨瓜洲寇日渡江未渡而被弑初非關顯忠之復淮西而責諸將也且是時海陵去采石卽至瓜

洲其間不過數日顯忠豈能盡復淮西當是海陵被弑後乘金兵之退而復之耳而必謂海陵之死由此又曲說也史彌遠之誅韓侂胄也本因楊皇后與侂胄有隙密使其兄楊次山與朝臣謀之彌遠遂奉命結參知政事錢象相中軍統製夏震伏兵六部橋伺侂胄早朝擁至玉津園槌殺之彌遠象祖赴延和殿以聞帝猶未信越數日始下詔暴侂胄罪「見楊皇后傳」此事應詳載於彌遠傳乃彌遠傳並不書且云彌遠因用兵力陳危迫之勢皇子詢聞之亦具奏乃罷侂胄陳自強而臺諫猶論不已侂胄始就誅召彌遠對延和殿則竟抹卻彌遠擅殺一節似乎先奏請得旨而後行誅矣理宗之立也寧宗早養宗室子貴和爲皇太子賜名竑彌遠買美人善琴者納之使伺皇子動靜竑嬖之一日指輿地圖曰此瓊崖州他日當置彌遠於此又嘗書几曰彌遠當決配八千里美人以告彌遠彌遠懼乃陰謀立沂王子昀使鄭清之傳之寧宗崩彌遠在禁中遣快行宣皇子令之曰今所宜乃沂王府中皇子非萬歲巷皇子也昀至則引至柩前舉哀畢然後召竑封爲濟王見濟王傳此則彌遠廢立之罪上通於天本傳中自應一一詳載乃但云寧宗崩擁立理宗而此等奸謀逆節絕無一語載入成何信史乎凡若此之類不一而足此非作史者意存忠厚欲詳著其善於本傳錯見其惡於他傳以爲善善長而惡惡短也蓋宋人之家傳表誌行狀以及言行錄筆談遺事之類流傳於世者甚多皆子弟門生所以標榜其父師者自必揚其善而隱其惡遇有功處未有不附會遷就以分其美有罪則隱約其詞以避之修史者固當參互以核其實乃不及考訂眞僞但據其書抄撮成篇毋怪是非乖謬如此也

【書牘下二】

宋史七

宋史の蕪雜なること最も甚しきは、即ち一史の中、亦た多く自ら相矛盾する者有り。徽宗内禪の一事、李綱傳に云ふ「皇太子開封牧と爲り、綱吳敏に謂ひて曰く『牧を建つるは豈に委ぬるに留守を以てせんと欲するに非ずや。然らば傳ふるに位號を以てするに非ざれば可ならず。』と。敏曰く『監國可なるか。』と。綱、肅宗の靈武建號は明皇に出でざれば、後世をして之を惜しましむるを以て對へと爲す。明日、敏遂に禪位の事を以て進説し、并せて李綱も亦た此の議

有り」と謂ふ。」と。是れ傳位の議、本綱より起こるなり。而るに吳敏傳は則ち「徽宗將に内禪せんとするに、蔡攸上意を探知し、敏を引き入對せしめ、敏遂に並びに綱を薦めて入見せしむ。」と謂へば、則ち又内禪は本徽宗の意に出づるに似たるなり。按ずるに張端義の貴耳録に「徽宗金人燕を破るを聞き、夜、當直の學士黃中令に詔し、詔を草せしめ己を罪し、並びに位を太子に傳へしめんとす。明日、己を罪するの詔下り、淵聖登極す。」と謂ひ、並びに徽宗の語を記し、「詔中の處分、蔡攸は道を盡すこと是ならざるも、只だ傳位の一事は、他の功勞に寄り做すを要む。」と謂ふ。宋史蔡攸傳に「帝内禪を欲し、『位を東宮に傳ふ』の字を親書して李邦彥に授く。邦彥敢へて承けず、以て攸に付す。攸は其の客吳敏に屬し、遂に議を定む。」と。而して李熙靖傳も亦た、「道君皇帝『外人内禪を以て吳敏の功と爲し、乃ち吾が意自り出づるを知らず。然らずんば、言ふ者且に族を滅せんとす。』と曰ふ。」を載す。是れ則ち内禪は本徽宗自り出で、而して李綱傳云ふ所は、但だ靖康傳信録に據り次を詮び篇を成すのみにして、恐くは未だ實を得たると爲さざるなり。或いは綱の議適々徽宗と合し、遂に此の事を成すか。又靖康圍城の事の如くは、姚平仲傳に「平仲營を劫さんと欲し、士卒の速かに戦ふを得ざるを以て言を爲し、李綱其の議を主り、城外の兵に令して俱さに平仲の節度を聽かしめ、遂に敗るるに及ぶ。」と。是れ劫營の計、李綱實に與に之を聞ず。而るに綱傳は則ち「平仲密かに斫營を奏し、夜半中使旨を傳へ、綱の策をして應ぜしむ。」と謂へば、則ち又綱は初めより未だ與に知らざる者に似たり。又綱傳に「紹興二年、出でて潭州に知たるに、荊湖の羣盜勝げて計ふ可からず。綱悉く之を蕩平す。」と。按ずるに、是の時尙ほ曹成等湖・湘・道・賀等の州に據り、而して楊么洞庭に在ること有り、直だ五年を至し始めて滅ぼすは、皆岳飛之を平ぐ。何ぞ盡く功を綱の潭州に知するの歳に歸するを得んや。韓世忠固より名將と稱せらる。然らば其の始めも亦た多く議す可し。劉光世の部將王德世忠の部將を殺し、會々詔ありて光世屯を移すに、世忠兵を遣りて其の後を襲はしめ、並びに建康守府の靡を奪ふ。事は趙鼎及び季陵の傳に見ゆ。而して滕康傳に又「世忠の兵御器械を奪ひ、諫臣を死に逼

む。」と謂ひ、常同も亦た此を以て其の驕狠忌憚無きを効す。魏江傳に又「内侍の李巽世忠と家に飲し、弓匠を刃傷す。」と謂ふ。是れ皆世忠の過、而るに本傳絶へて載せず。張浚李綱の宋齊愈を誅するに因り、其の私意を以て侍從を殺すを効し、綱遂に相を罷むは、高宗紀及び綱傳に見ゆ。浚又嘗て秦檜の大事に任ず可きを薦むは、趙鼎傳に見ゆ。又「嘗て岳飛と呂祉・王徳・酈瓊の兵の事を論じ合はず、遂に怒る。飛因りて兵を解き喪に奔り歸る。浚猶ほ其れ兵を併すを得ず、以て去り君に要む。」と謂ひ、遂に張宗元に命じて其の軍を權らしむ。事は高宗紀に見ゆ。汪伯彥既に眨き、帝之を念ふ。浚伯彥の舊嘗て己を引くを以て、遂に秦檜と郊祀の恩に援きて起こして宣州に知たらしむは汪伯彥傳に見ゆ。陳東闕に伏し書を上り、黃潛善の輩已に之を殺し、浚又胡理の東の書を筆削し、布衣を以て大臣を進退するの權を挾まんと欲すと奏し、遂に追勸編置す。蓋し浚は乃ち潛善の客にして理は則ち李綱の客なり。事は戴埴の鼠璞に見ゆ。乃るに浚傳此等の處に於て並びに一語も無し。惟だ曲端を殺すことは略ぼ傳中に見ゆるも、而るに又「端の部將張忠彦金に降る、故に之を獄に下す。」と謂ふ。其の酈瓊の叛するに干いて、又「間を遣りて蠟書を持たしめ瓊に遣り、金人疑ひ、遂に劉豫を廢す。」と謂ふは、又金人豫を廢すを以て功を浚に歸せんと欲すに幾し。楊公擒とせらるに至りては、皆岳飛の力なり。而るに浚傳中全て功を浚に歸し、「賊二十餘萬相繼ぎて降り、湖寇盡く平ぐ。」と謂ひ、絶へて飛一字にも及ばざるは何ぞや。何鑄嘗て羅汝楫と岳飛を効すは汝楫傳に見ゆ。鑄又嘗て秦檜の爲に王居正を効し趙鼎の黨と爲し、鼎遂に職を奪はれ奉祠するは王居正傳に見ゆ。又張九成の趙鼎に黨すを効すは、張九成傳に見え、又廖剛と陳淵等と相朋比爲るを効すは、廖剛傳に見ゆ。是れ鑄の姦邪は一ならずして足る。乃るに鑄傳並びに一字も無く、反つて「岳飛の獄を治むに力めて其の冤を辨じ、當に故無く一大將を殺すべからず。」と謂ふと云へば、竟に正直なる者に似る。他は、文彦博燈籠錦を以て張貴妃に媚すは、唐介傳に見ゆるも、而るに本傳載せず。建炎元年、葉夢得杭州に知たるに、軍校陳通亂を作し、夢得執へらるは、高宗本紀に見え、葉夢得初め蔡京の客と爲り、京倚りて腹心と爲し、嘗て京の爲

めに元祐の黨籍を立て、三等に分ち罪を定め、後應天府に知たりしとき、京の黨なるを以て落職するは、毛注・強淵明・胡安國等の傳に見ゆるも、而るに本傳載せず、呂頤浩・朱勝非を引き以て秦檜と傾ひ、胡安國・勝非の當に復た用ふべからざるを効し、安國去るを求め、檜三たび章を上りて之を留むは、秦檜傳に見ゆるも、而るに安國傳載せず、李顯忠宿州を破り、其の金帛を私し、又邵宏淵と忿争し、遂に潰歸を致すは、胡銓傳に見ゆるも、而るに本傳亦た載せず、岳珂當塗に守たりしとき、横斂百出し、貪刻の吏を置き、告計の門を開き、以て民を罔して其の財を没すは、徐慶卿傳に見ゆるも、而るに本傳亦た載せず、辛棄疾・韓侂胄に附和し兵端を開くは、侂胄傳に見ゆるも、而るに本傳亦た載せざるが如し。又虞允文傳に「金主亮南侵せしとき、王權和州自り遁げ歸り、詔して李顯忠を以て權に代らしめ、允文に令して顯忠を趣して權の軍に赴かしむ。允文采石に至るに、權已に去り、顯忠未だ來らず、我が師三五星散し、鞍を解き道旁に坐す。允文坐して顯忠を待てば則ち國事を悞つと念ひ、遂に諸將を招して、勉むに忠義を以てし、諸將皆死戦し、大捷を得。明日又敵を楊林口に敗り、顯忠始めて至る。」と。是れ采石の捷、顯忠實に未だ嘗て與らざるなり。而るに顯忠傳に則ち「金主將に江を濟らんとするに、詔して顯忠を以て王權に代らしめ、虞允文に命じ顯忠の交軍を趣せしめ、是に於いて采石の捷有り。」と云へば、則ち此の捷を以て功を顯忠に分つなり。顯忠傳に又「是の時顯忠萬人を遣りて江を渡らしめ、盡く淮西の州郡を復し、亮諸將を切責し、諸將之を弑す。」と云へば、則ち並びに海陵の弑せらるるを以て顯忠の淮西を復すに由る。按ずるに海陵は采石の渡るを得ざるに因り、即ち瓜洲に趨り、日を尅みて江を渡らんとするに、未だ渡らずして弑せらる。初めより顯忠の淮西を復し而して諸將を責むに關はるに非ざるなり。且つ是の時海陵采石を去り即ち瓜洲に至る、其の間數日に過ぎず、顯忠豈に能く盡く淮西を復せんや。當に是れ海陵弑せらるの後、金兵の退くに乘じて之を復すのみにして、必ず海陵の死此に由ると謂ふは又曲説なり。史彌遠の韓侂胄を誅するや、本より楊皇后と侂胄と隙有るに因り、密かに其の兄楊次山をして朝臣と之を謀らしめ、彌遠遂に命を奉じ、參知政事錢

象相・中軍統製夏震と結び、兵を六部橋に伏し、侂胄を早朝に伺ひ、擁して玉津園に至り之を搥ち殺す。彌遠・象祖延和殿に赴き以て聞ず、帝猶ほ未だ信ぜざるがごとし。數日を越し、始めて詔を下し侂胄の罪を暴く。「楊皇后傳に見ゆ。」此の事應に詳さに彌遠傳に載すべきに、乃るに彌遠傳並びに書せず。且つ「彌遠兵を用ふに困り、力めて危迫の勢を陳べ、皇子詢之を聞き、亦た具さに奏せば、乃ち侂胄・陳自强を罷く。而るに臺諫猶ほ論じて已まず、侂胄始めて誅に就き、彌遠を召して延和殿に對す。」と云ひ、則ち竟に彌遠擅殺の一節を抹卻するは、先ず奏請して旨を得、而る後に誅を行ふに似たり。理宗の立つや、寧宗早に宗室の子貴和を養ひ皇太子と爲し、名竑を賜ふ。彌遠美人の琴を善くする者を買ひ之を納れ、皇子の動靜を伺はしむ。竑之を嬖し、一日輿地圖を指して「此れ瓊崖州、他日當に彌遠を此に置くべし。」と曰ひ、又嘗て几に書して曰く「彌遠當に八千里に決配すべし。」と。美人以て彌遠に告げ、彌遠懼れ、乃ち陰かに沂王の子昫を立てるを謀り、鄭清之をして之に傳たらしむ。寧宗崩じ、彌遠禁中に在り、快行を遣りて皇子に宣せしむに、之に令して曰く「今宣する所は乃ち沂王府中の皇子にして、萬歲巷の皇子に非ざるなり。」と。昫至れば則ち引きて柩前に至り、擧哀畢る。然る後竑を召し封じて濟王と爲すは、濟王傳に見ゆ。此れ則ち彌遠廢立の罪、上天に通ず。本傳中自ら應に一一詳さに載すべくに、乃るに但だ「寧宗崩じ、理宗を擁立す。」と云ふのみにして、而して此れ等の奸謀逆節絶へて一語も載入する無きは、何の信史と成さんや。凡そ此の若きの類、一ならずして足る。此れ史を作す者の意忠厚に存し、其の善を本傳に詳かに著し、其の惡を他傳に錯ぜ見はし、以て善を善とすること長くして惡を惡とすること短かきを爲さんと欲するに非ざるなり。蓋し宋人の家傳・表誌・行狀、以て言行錄・筆談・遺事の類に及ぶまで、世に流傳する者甚だ多く、皆子弟・門生の其の教師を標榜する所以の者にして、自ら必ず其の善を揚げ而して其の惡を隱し、功有る處に遇へば未だ附會遷就し以て其の美を分たざること有らず、罪有れば則ち其の詞を隱約し以て之を避く。史を修む者、固より當に參互し以て其の實を核すべきに、乃るに眞偽を考訂するに及ばず、但だ其の書

に據り抄撮して篇を成す。怪む母れ、是非乖謬すること此の如くなるを。

【語注】

○徽宗内禪の……『宋史』卷三百五十八、列傳一百十七に李綱傳上、同卷三百五十二、列傳第一百一十一に吳敏傳、同卷四百七十二、列傳第二百三十一、姦臣傳二に蔡攸傳、同卷三百五十七、列傳第一百一十六に李熙靖傳有り。『貴耳錄』は卷下、宣和七年南郊畢の條を参照。『靖康傳信錄』は李綱の著。内禪の事は卷一冒頭に見える。○又靖康圍城……姚平仲は姚古の子。事績は『宋史』卷三百四十九、列傳第一百八、姚古傳に見えるが、趙翼の引用は同卷三百三十五、列傳第九十四、种師道の文。李綱傳は前注を参照。○又綱傳に紹……『宋史』卷三百五十九、列傳一百十八、李綱傳下。同卷三百六十五、列傳第一百二十四、岳飛傳に「紹興」二年、賊曹成擁衆十餘萬、由江西歷湖湘、據道・賀二州。命飛權知潭州、兼權荊湖東路安撫都總管、付金字牌・黃旗招成。……進兵追成、成走宣撫司降。……（五年）飛遂如鼎州。……。公負固不服、方浮舟湖中。……。公投水、牛皋擒斬之。」と有る。○韓世忠固よ……韓世忠は『宋史』卷三百六十四、列傳第一百二十三に傳有り。同卷三百六十、列傳第一百二十九に趙鼎傳、同卷三百七十五、列傳第一百三十四に滕康傳、同卷三百七十六、列傳第一百三十五に魏玠傳有り。常同の劾奏は同卷三百七十六、列傳第一百三十五、常同傳に見える。なお、卷三百七十七、列傳第一百三十六、季陵傳に當該の事項は見えない。○張浚李綱の……張浚は『宋史』卷三百六十一、列傳第一百二十に傳有り。李綱罷免の事は、同卷二十四、高宗紀一、建炎元年十月及び同卷三百五十八、列傳一百十七に李綱傳上に見える。趙鼎は、同卷三百六十、列傳第一百二十九に傳有り。岳飛との事は、同卷二十八、高宗紀五、紹興七年四月に見える。汪伯彥は同卷四百七十三、列傳二百三十二、姦臣傳三に傳有り。戴埴の『鼠璞』卷上に陳東伏闕の條有り。○何鑄嘗て羅……何鑄は『宋史』卷三百八十、列傳第一百三十九に傳有り。同卷三

百八十、列傳第一百二十九に羅汝楫傳、同卷三百八十一、列傳第一百四十に王居正傳、同卷三百七十四、列傳第一百三十三に張九成傳及び廖剛傳有り。○文彥博燈籠：—文彥博は『宋史』卷三百一十三、列傳第七十二に傳有り。同卷三百一十六、列傳第七十五に唐介傳有り。○建炎元年葉：—葉夢得執えらる事は『宋史』卷二十四、高宗紀一、建炎元年八月に見える。同卷三百四十八、列傳第一百七七に毛注傳、同卷三百五十六、列傳第一百一十五に強淵明傳、同卷四百三十五、列傳第一百九十四、儒林傳五に胡安國傳有り。○呂頤浩朱勝：—胡安國傳は前注を参照。『宋史』卷四百七十三、列傳第二百三十二、姦臣傳三に秦檜傳有り。○李顯忠宿州：—李顯忠は『宋史』卷三百六十七、列傳第一百二十六に傳有り。同卷三百七十四、列傳第一百三十三に胡銓傳有り。○岳珂當塗に：—岳珂は岳飛の子の霖の子。『宋史』卷三百六十五、列傳第一百二十四、岳雲傳に「霖子珂、以淮西十五御札辯驗彙次、凡出師應援之先後皆可考。嘉定間、爲籲天辯誣集五卷・天定錄二卷上之。」とのみ有る。徐慶卿は徐鹿卿か。同卷四百一十四、列傳第一百八十三に徐鹿卿傳有り。○辛棄疾韓侂：—辛棄疾は『宋史』卷四百一、列傳第一百六十に傳有り。同卷四百七十四、列傳第二百三十三、姦臣傳四に韓侂胄傳有り。○又虞允文傳：—『宋史』卷三百八十三、列傳第一百四十二に虞允文傳、『宋史』卷三百六十七、列傳第一百二十六に李顯忠傳有り。○史彌遠の韓：—史彌遠は『宋史』卷四百一十四、列傳第一百七十三に傳有り。同卷二百四十三、列傳第二、后妃傳下に寧宗恭聖仁烈楊皇后傳有り。また、濟王傳は同卷二百四十六、列傳第五、室室傳三、鎮王竑傳を指す。

【現代語譯】

『宋史』の雑然としてゐることの最も激しい點は、その一史の中に、また多く自己矛盾してゐる箇所があることである。徽宗内禪の一事について、李綱傳に「皇太子が開封牧になると、李綱は吳敏に『牧を建てるのは留守を委ねようという

のではないのですか。そうであるならば尊號を傳えるのでなければなりません。』と言った。吳敏が『國事を監督させられるのか。』と言うと、綱は『(唐の)肅宗が靈武で即位した事は、玄宗から出た話ではなかったたので、後世これを惜しむ結果となった。』ことを話して對えとした。翌日、敏はそのまま禪位の事を徽宗に進言し、同時に、李綱にもこれについての意見が有る、と言った。』と言っている。これは、傳位の議は、本來李綱から起こったのである。しかし、吳敏傳には「徽宗が内禪を行おうとした時、蔡攸は徽宗の意思を察知し、吳敏を宮中に招いて徽宗の問いに對えさせ、吳敏はついで李綱を薦擧して宮中に入れ、徽宗に見えさせた。」と言っている。又内禪は本來徽宗の意思から出たかのである。考えてみるに、張端義の『貴耳錄』に「徽宗は金人が我が燕を破ったことを聞くと、夜、當直の學士黃中令に詔して、詔を起草させ、己の罪を謝し、ついで位を太子に傳えようとした。翌日、己の罪を謝す詔が下り、欽宗が即位した。」と言っており、ついで徽宗の語を記して「詔の中の處分について、蔡攸は道を盡すこと宜しくはなかったが、ただ傳位の一事は、彼の功勞とすることを望む。」と言っており、『宋史』蔡攸傳には「徽宗は内禪を望み『位を東宮に傳ふ』の文字を親書して李邦彥に授けた。李邦彥はとも承けることができず、それを蔡攸に任せた。蔡攸はその客である吳敏に委囑し、そこでこの議は決定された。」とあり、そして李熙靖傳にもまた、道君皇帝つまり徽宗が「よそ人は内禪を吳敏の功として、吾が意より出たことを知らない。もし吾が意より出たのでなかったら、内禪を言う者など族滅していようものを。」と言っているのを載せている。これはつまり、内禪は本來徽宗から出た話であり、李綱傳に言っているのは、ただ李綱の『靖康傳信錄』に依據して順序を選んで篇を成しているだけであって、恐くは正しい内容とは言えないのである。或いは、李綱の議が適々徽宗の思いと合して、そのままこの事が成されたのかもしれない。又、靖康圍城の事については、姚平仲傳に「姚平仲は敵營を脅かそうとして、士卒では短期決戦はできないことを理由として發言し、李綱がそのことを主り、城外の兵に命令して漏れなく姚平仲の指圖に従わせたが、敗れる結果となっ

た。」とある。これは、敵營を脅かす計略は、李綱も實は姚平仲とともにこれを奏上していたのである。しかし、李綱傳では「姚平仲は密かに敵營を脅かす計略を奏上し、夜中に中使が聖旨を李綱に伝え、李綱の策も實行して姚平仲に呼應させた。」と言っているのだ、つまり又、李綱は初めから姚平仲の計略を知らなかったようである。又、李綱傳に「紹興二年、朝廷から出向して潭州を治めたが、荊湖の羣盜は數えられないほどいた。李綱はこれを残さず一掃した。」とある。考えるに、この時にはまだ曹成等が湖・湘・道・賀等の州を足場とし、そして楊么が洞庭にいたのであって、そのまま五年経って始めてこれを滅ぼしたのは、すべて岳飛が平定したのである。どうしてこの功績を、李綱が潭州を治めた歳にすべて歸着させてしまふことができようか。韓世忠は元來名將と稱賛されている。そうであるならば、その始めの事跡についても多く論ずるべきである。劉光世の部將王徳が韓世忠の部將を殺したが、ちょうどその時、詔が有つて劉光世は駐屯地を移すことになったが、韓世忠は兵を遣つて劉光世軍の後を襲わせ、ついで建康守府の官廳を奪いとつた。この事は、趙鼎と季陵の傳に見える。そして、滕康傳には「韓世忠の兵が御器械を奪い、諫臣を死に追い込んでゐる。」と言つており、常同もまたこの事について、その驕狼で忌憚無いことを彈劾している。魏玠傳には「内侍の李興は韓世忠と家で酒を飲み、弓匠を刃物で傷つけた。」と言っている。これらは皆、韓世忠の過失であるが、しかし本傳は全く載せていない。張浚は、李綱が宋齊愈を誅殺したこと、その私意によつて侍従を殺したのだと彈劾し、李綱がそのまま宰相を罷めた事は、高宗紀と李綱傳に見える。又嘗て張浚が秦檜を大事に任ずべきと推薦した事は、趙鼎傳に見える。又嘗て張浚は、岳飛と呂祉・王徳・酈瓊の兵の事を論じたが話が合わず、とうとう怒つた。岳飛はそれによつて兵を解散させ、母の喪に奔り歸つた。それでも張浚は「岳飛は兵を併合することができなかった、朝廷を去ると言つて陛下を脅しているのだ。」と言つて、そのまま張宗元に命じて岳飛の軍の兵權をとらせた。この事は高宗紀に見える。汪伯彦は既に政治の中心から退いていたが、高宗は彼のことを氣にかけていた。張浚が、汪伯彦が昔自分を引き

立ててくれた恩から、秦檜とともに、郊祀の恩赦に寄せて話を起こし、汪伯彥を宣州の知事とした事は、汪伯彥傳に見える。陳東が闕に伏して書を奏上した時、黃潛善等が已に陳東を殺した後、張浚が又、胡珪は陳東の上書を筆削しており、布衣の身を以て大臣の進退を左右する權力を持つたのだ、と奏上し、そのまま胡珪を追加處分した。思うに、張浚はつまり黃潛善の客であり、胡珪はつまり李綱の客である。この事は戴埴の『鼠璞』に見える。しかし、張浚傳はこれ等の事についてどれも一語も記述が無い。ただ、曲端を殺した事は、ほぼ張浚傳の中に見えるが、しかし又「曲端の部將張忠彥が金に降った、そのために曲端を獄に下した。」と言っている。酈瓊が叛して金に去った箇所では「又、間諜に蠟書を持たせて酈瓊に遣わし、金人はこれを疑い、そのまま劉豫を廢した。」と言っているのは、又、金人が劉豫を廢したことに對する功績を張浚に歸屬させようとしているようなものである。楊公が擒となつた件に至っては、すべて岳飛の力によるものである。しかし、張浚傳の中では、すべて功績を張浚に歸屬させ「賊二十餘萬が相繼いで降伏し、湖寇は残らず平定された。」と言っており、とうとう岳飛の「飛」一字すらも記述されていないというのは、どうしたことなのか。何鑄が以前に羅汝楫と、岳飛を彈劾した事は汝楫傳に見える。又、何鑄がかつて秦檜のために王居正を趙鼎の黨であると彈劾し、趙鼎がそのまま職を奪われて奉祠するに至つた事は、王居正傳に見える。又、張九成が趙鼎に黨することを彈劾した事は、張九成傳に見え、又、廖剛と陳淵等とが互いに結束し合っている件を彈劾した事は、廖剛傳に見える。このように、何鑄の姦邪は全てを出し盡さなくても充分な程である。しかし、何鑄傳にはどれも一字の記述も無く、反つて「岳飛の下獄を受け持つて、努めてその冤罪を訴えて、『理由も無く一大將を殺してはならない。』と言つた。」などと言っているの、なんとも清廉な人に見えてしまっている。この他には、文彥博が燈籠錦を献上して張貴妃に媚びを賣つた事は、唐介傳に見えるが、しかし文彥博傳は載せていない。建炎元年に、葉夢得が杭州の知事であつた時、軍校の陳通が亂を起こし、葉夢得がそれを捕らえた事は、高宗本紀に見え、葉夢得が初め蔡京の客となつ

て、蔡京は彼を侍んで腹心とし、かつて蔡京のために元祐の黨籍を立てて、罪を三等に分け定め、後に應天府の知事であった時、蔡京の黨であることから職を失った事は、毛注・強淵明・胡安國等の傳に見えるが、しかし葉夢得傳は載せていない。呂頤浩が朱勝非を引き立てて秦檜と權を争い、胡安國が朱勝非を復た任用すべき者ではないと彈劾し（たが聞き入れられず）、胡安國は自身が朝廷から去る事を望み、秦檜が三たび奏上して胡安國を留めさせた事は、秦檜傳に見えるが、しかし胡安國傳は載せていない。李顯忠が宿州を破り、その金帛を着服し、又、邵宏淵と忿争して、結局自軍を潰滅させて歸ることになった事は、胡銓傳に見えるが、しかし李顯忠傳は載せていない。岳珂が當塗を守っていた時、無理な課税を頻發し、貪欲で刻薄な官吏を用い、民が訴え出るための告許の門を設置しながらも、そこに來た民を一網に捕らえてその財産を沒收した事は、徐慶卿傳に見えるが、しかし岳珂傳は載せていない。辛棄疾が韓侂胄と意見を同じくして恢復への兵端を開いた事は、韓侂胄傳に見えるが、しかし辛棄疾傳は載せていない。といったようなものがある。又、虞允文傳に「金主亮が南侵した時、王權が和州から逃げ歸って來たので、李顯忠に詔してして王權に代らせ、虞允文に命令して李顯忠を促せて王權の軍に行かせた。虞允文が采石に至ると、王權は已に去っており、李顯忠はまだ來ていかなかったが、我が宋の軍兵はばらばらに解散しており、鞍を解いて道端に坐る者もいた。虞允文は、坐して李顯忠を待っていければ國事を誤つと思ひ、そのまま諸將を招して、忠義を説いて勵まし、諸將皆死戦して、大勝するを得た。翌日、又敵を楊林口に敗り、その時になって李顯忠はやっと辿り着いた。」とある。これは、采石の戦勝は、李顯忠が實に關與していないのである。しかし、李顯忠傳には「金主亮が江を渡ろうとしたので、李顯忠に詔して王權に代らせ、虞允文に命じて顯忠の交軍を促せて、こうして采石の戦勝が有った。」と言っている。つまりこの戦勝の功績を李顯忠にも分けている。李顯忠傳には又「この時、李顯忠は一萬人の兵に江を渡らせて、淮西の州郡をすべて恢復したので、金主亮は諸將をきつく叱責し、諸將は亮を弑殺した。」と言っている。ついでに金の海陵王亮が弑殺さ

れた一件まで李顯忠が淮西を恢復した事を理由としている。考えてみるに、海陵王亮は采石を渡ることができなかつたことから、瓜洲に移動し、日を定めて江を渡ろうとしたのに、まだ渡る前に弑殺されたのであって、端から李顯忠が淮西を恢復したので諸將を叱責した事とは關りがないのである。更にこの時、海陵王亮が采石を去って瓜洲に至るまで、その間數日に過ぎないのに、李顯忠がどうして淮西をすべて恢復できていたことがあるのか。これはまさに、海陵王亮が弑殺された後、金兵が撤退するのに乗じて恢復したというのに過ぎないのであって、海陵王亮の死は絶対に李顯忠の淮西恢復を理由としている、と言うのは、又誤つた説である。史彌遠が韓侂胄を誅殺した事は、元々楊皇后と韓侂胄との不仲に起因しており、密かに楊皇后の兄楊次山に朝臣と韓侂胄の誅殺を計畫させ、史彌遠はそのまま命を奉じて、參知政事の錢象相・中軍統製の夏震と結託し、兵を六部橋に伏して、早朝に韓侂胄を待ち伏せし、彼を捕らえて玉津園まで連れて來て槌ち殺した。その後、史彌遠と錢象祖は延和殿に赴いて奏上したが、寧宗はまだ韓侂胄の死を信じていないようであつた。數日経つて、寧宗は始めて詔を下して韓侂胄の罪を暴いた。「この事は楊皇后傳に見える。」この事は當然、史彌遠傳に詳細に載せるべきであるが、しかし、史彌遠傳は全く書いていない。更に、「史彌遠が國家が兵を用いることについて、努めてその危迫の情勢を述べ、皇子詢はこれを聞いて、また詳しく奏上したので、韓侂胄・陳自強を退けた。しかし、臺諫がまだこの件を論じ續けたので、韓侂胄はやつと誅殺され、寧宗は史彌遠を召して延和殿で對面した。」と言つて、とうとう史彌遠擅殺の一節を抹卻しているのは、先ず奏上して韓侂胄誅殺の許しを請ひ願つて寧宗の旨を得、その後誅殺を行ったかのようである。理宗が即位するには、寧宗は早くから宗室の子の貴和を養つて皇太子とし、竝の名を賜與した。史彌遠は琴を上手く弾く美人を買つて太子竝に納め、皇子の動靜を伺わせた。竝はこの女を寵愛し、ある日、地圖を指して「これは瓊崖州だ、いつの日にか史彌遠をここに配入してやろう。」と言ひ、又嘗て、肘掛けに「史彌遠は必ず八千里遠い地に配入してやる。」と書いた。女はこれを史彌遠に告げ、史彌遠は恐懼し

て、ひそかに沂王の子昫を立てることを謀り、鄭清之を王子昫の傳とした。寧宗が崩御した時、史彌遠は禁中であって、急使を派遣して皇子に告げさせるのに、その使いに命令して「今、急を告げる相手は沂王府に居る皇子であって、萬歲巷の皇子ではないぞ。」と言った。王子昫が至ると、史彌遠は彼を引っ張って柩前に至り、擧哀の禮を執り終わらせた。その後になって、太子竑を召喚して濟王に封じた事は、濟王傳に見える。これはつまり、史彌遠の廢立の罪は、上は天意にまで通じているのである。史彌遠傳は自然當然にこの件について一々詳細に載せるべきであるが、しかしただ「寧宗が崩御し、理宗を擁立した。」と言うのみであって、これ等の奸謀逆節を全く一言も書き入れていないのは、どうしたら信すべき史書として扱うことができようか。こうした事類は、全てを列擧する必要もあるまい。これは、宋史を作る者の思いが忠厚にあって、人物の善行を本傳に詳しく著し、その悪行を他傳に混ぜ込むことで、善を善として稱揚し、惡を惡として詳しく言及しないでおこう、としているのではない。思うに、宋人の家傳・表誌・行狀、更には言行錄・筆談・遺事の類に及ぶまで、世に流傳しているものは甚だ多いが、どれもその人物の子弟・門生が父や師を標榜するために著したものであって、自然と必ずその善行を稱揚してその悪行を隠しており、功績がある箇所では牽強附會して、その功績をその人物のものに移してしまい、その美名を分有しないということがなく、罪があれば、それについての言葉や書を隠し省略して、詳しい記述を避けているのである。史書を編修する者は、本来、當然のこととして、史料を互いに比較して、その事實を確認すべきであるのに、しかし、眞偽を考訂することもなく、ただその書物を書き寫して一篇としているのである。怪しむまでもなからう、『宋史』の記述がここまでは是非乖謬していることは。

(田中良明)

宋史卷帙又有當更定者張憲楊再興牛皋皆岳飛部將何以不附於飛傳後況皋傳末歷敘飛分遣諸將恢復東西京州郡之事非皋所遣而敘于皋傳可見舊史本以皋傳附飛傳之後及編次時忽離而二之也解元成閔皆韓世忠部將亦何以不附世忠傳後至劉子羽胡世將與吳玠兄弟在蜀同功共事何以不與玠璘相次郭浩楊政又皆吳氏部將用兵與吳氏相終始何以不附於玠璘之後王友直李寶皆自北起義來歸既已同列一卷李顯忠亦自鄜延起義開關數國死南投功名尤著魏勝起兵漣水據海州以歸與寶共事何不彙列一卷以顯忠爲首勝寶友直次之秦檜擅國十九年凡居政府者莫不以微忤斥去惟王次翁始終爲檜所憐則次翁應附檜傳之後陳自強之附韓侂胄與次翁之附檜一也則自強亦應附侂胄傳之後乃皆編入列傳不著其姦黨何也權邦彥乃徽欽時人卒於高宗紹興三年乃廁於寧宗諸臣之列汪若海張運柳約亦皆欽高時人乃廁於理宗諸臣之列林勳劉才邵等皆高孝時人乃廁於德祐末造李庭芝諸臣之後不幾顛倒時代乎徐清叟徐榮叟兄弟也人品官位亦略相同何以不毗連相次而各置一卷宣繪鄒應龍別之傑金淵張礪饒虎臣戴慶珂諸傳但敘履歷絕無一言一事則傳之何爲五代史不爲韓通立傳宋史補之誠是矣彭義斌自山東起義隨季全來歸卽與趙范趙葵等破金兵義斌獨擊至下灣渡掩金人於淮「見賈涉傳」後因全擅戕殺制置使許國卽斬全使大罵曰逆賊受國厚恩擅殺制使我必報此讐會全攻恩州義斌卽出戰敗全求制使徐晞稷書與義斌連和義斌致書趙善湘曰不誅逆全恢復不成但能遣兵扼淮斷其南路必可滅賊賊平之後義斌戰河北盱眙略將戰河南神州可復也范亦謂善湘曰義斌蹙全如山壓卵然必請而後討者知尊朝廷也「見趙范傳」義斌攻眞定降金將武仙衆至數十萬拓地而北與元兵戰於內黃之五馬山兵敗不屈死「見李全傳」則此人何得不立傳而宋史竟遺之又一百第六卷既有李熙清常州晉陵人靖康之變以拒張邦昌爲命憂憤不食索筆書王維百官何日再朝天之句而死二百十二卷又有李熙靖晉陵人張邦昌使直學士院憂憤不食謂友人曰百官何日再朝天乎是一人也而竟重出何其漫無審訂若此又南唐世家既立韓熙載傳矣劉仁瞻皇甫暉姚鳳皆南唐完節之臣何以又不爲立傳以附於熙載之後南唐徐鉉北漢楊業後皆仕於宋旣入之宋臣列傳矣南唐之周惟簡西蜀之歐陽迥亦皆仕宋歷官多年何以又不入宋臣列傳而以附南唐西蜀世家之

後乎此皆自亂其例者也

【書き下し】

16 宋史八

宋史の卷帙に又當に更めて定むべき者有り。張憲・楊再興・牛皐は皆岳飛の部將、何を以て飛傳の後に附せざるか。況んや皐傳の末、飛の諸將を分遣し東西京の州郡を恢復するの事を歴敘するをや。皐の遣はず所に非ずして皐傳に敘すれば、舊史は本より皐傳を以て飛傳の後に附すも、編次の時に及び忽ち離して之を二とするを見るべきなり。解元・成閔は皆韓世忠の部將なるも、亦た何を以て世忠傳の後に附せざるか。劉子羽・胡世將は、吳玠兄弟と蜀に在り功を同じし事を共にするに至るに、何を以て玠・璘と、相次がざるか。郭浩・楊政も又皆吳氏の部將、兵を用ふること吳氏と相終始するに、何を以て玠・璘の後に附せざるか。王友直・李寶は皆北自り起義來歸し、既已すでに同一に一卷に列せらる。李顯忠も亦た鄜延自り起義し、間く數國に關はり、死を冒して南投し、功名尤も著はる。魏勝も兵を連水に起こし、海州に據り以て歸し、寶と事を共にす。何ぞ一卷に彙列し、顯忠を以て首と爲し、勝・寶・友直、之に次がざるか。秦檜の國を擅にすること十九年、凡そ政府に居る者、微かに忤ふを以て斥去せざるは莫し。惟だ王次翁のみ始終檜の憐れむ所と爲れば、則ち次翁は應に檜傳の後に附すべし。陳自强の韓侂胄に附すと次翁の檜に附すとは一なり。則ち自强も亦た應に侂胄傳の後に附すべし。乃るに皆列傳に編入し、其の姦黨を著さざるは何ぞや。權邦彥は乃ち徽・欽の時の人、高宗の紹興三年に卒す。乃るに寧宗の諸臣の列に廁ふ。汪若海・張運・柳約も亦た皆欽・高の時の人。乃るに理宗の諸臣の列に廁ふ。林勳・劉才邵等は皆高・孝の時の人。乃るに德祐も未造の李庭芝諸臣の後に廁ふるは、時代を顛倒するに幾からずや。徐清叟・徐榮叟は兄弟なり。人品官位も亦た略々相同じ。何を以て毗連相次がずして、各々一卷に置くや。

宣・繪・鄒應龍・別之傑・金淵・張礪・饒虎臣・戴慶珂の諸傳、但だ履歷を敘すのみ。絶へて一言一事無し。則ち之を傳するは何爲れぞや。五代史韓通が爲めに傳を立てざれば、宋史之を補ふ。誠に是ならん。義斌山東自り起義し、李全に隨ひて來歸す。即ち趙范・趙葵等と金兵を破り、義斌獨り撃ちて下灣渡に至り、金人を淮に掩ふ。「賈涉傳に見ゆ。」後に全の擅に制置使の許國を戕殺するに因りて、即ち全の使を斬り、大いに罵りて曰く「逆賊國の厚恩を受くるも、制使を擅殺す。我必ず此の讐を報ぜん。」と。會々全恩州を攻め、義斌即ち戰いで全を敗る。全制使の徐晞稷に書を義斌に與へて連和せんことを求む。義斌書を趙善湘に致して曰く「逆全を誅せずんば恢復成らず。但だ能く兵を遣はし淮を扼へ其の南路を斷てば、必ず賊を滅すべし。賊平らぐの後、義斌河北に戰ひ、盱眙の諸將河南に戰へば、神州復すべきなり。」と。范も亦た善湘に謂ひて曰く「義斌の全に覺ること山の卵を壓するが如し。然るに必ず請ひて後に討たんとするは、朝廷を尊ぶを知らばなり。」と。「趙范傳に見ゆ。」義斌眞定を攻め、金將武仙を降し、衆數十萬に至り、地を拓きて北し、元兵と内黃の五馬山に戰ひ、兵敗るるも屈せずして死す。「李全傳に見ゆ。」則ち此の人何ぞ傳を立てざるを得んや。而るに宋史竟に之を遺す。又二百第六卷に既に「李熙清は常州晉陵の人、靖康の變、以て張邦昌の僞命を拒み、憂憤して食はず、筆を求め王維の百官何れの日にぞ再び天に朝せんのを書して死す。」と有り。二百十二卷に又「李熙靖は晉陵の人、張邦昌直學士院を使はし、憂憤し食はず、友人に謂ひて曰く『百官何れの日にぞ再び天に朝せんか。』と。」と有り。是れ一人なり。而るに竟に重出す。何ぞ其れ漫として審訂無きこと此の若きか。又南唐世家既に韓熙載傳を立てつ。劉仁贍・皇甫暉・姚鳳は皆南唐完節の臣、何を以て又爲に傳を立てず、以て熙載の後に附すか。南唐の徐鉉・北漢の楊業は、後に皆宋に仕へ、既に之れを宋臣の列傳に入る。南唐の周惟簡・西蜀の歐陽廻も亦た皆宋に仕へ歴官すること多年、何を以て又宋臣の列傳に入れずして、以て南唐・西蜀の世家の後に附すか。此れ皆自ら其の例を亂す者なり。

【語注】

○張憲楊再興……岳飛は『宋史』卷三百六十五、列傳第一百二十四に傳有り、子の岳雲が併傳されている。張憲・楊再興・牛皐は同卷三百六十八、列傳第一百二十七に傳有り、王德・王彥・魏勝と合傳。○解元成閔は……韓世忠は『宋史』卷三百六十四、列傳第一百二十三に傳有り、子の韓彥直が併傳されている。解元は同卷三百六十九、列傳第一百二十八に傳有り、張俊・張宗顔・劉光世・王淵と合傳。成閔は同卷三百七十、列傳第一百二十九に傳有り、王友直・李寶・趙密・劉子羽・呂祉・胡世將・鄭剛中と合傳。○劉子羽胡世……吳玠・吳璘は『宋史』卷三百六十六、列傳第一百二十五に傳有り、劉錡と合傳。劉子羽・胡世將は同卷三百七十、列傳第一百二十九に傳有り。前注參照。郭浩・楊政は『宋史』卷三百六十七、列傳第一百二十六に傳有り、李顯忠・楊存中と合傳。○王友直李寶……王友直・李寶は『宋史』卷三百七十、列傳第一百二十九に傳有り、「解元成閔は」の注を參照。李顯忠は同卷三百六十七、列傳第一百二十六に傳有り、前注參照。魏勝は同卷三百六十八、列傳第一百二十七に傳有り、「張憲楊再興」の注を參照。○秦檜の國を……秦檜は『宋史』卷四百七十三、列傳第二百三十二、姦臣傳三に傳有り、黃潛善・汪伯彥と合傳。王次翁は同卷三百八十、列傳第一百二十九に傳有り、何鑄・王次翁・范同・楊愿・樓炤・勾龍如淵・薛弼・羅汝楫・蕭振と合傳。○陳自強の韓……韓侂胄は『宋史』卷四百七十四、列傳第二百三十三、姦臣傳四に傳有り、萬俟卨・丁大全・賈似道と合傳。陳自強は同卷三百九十四、列傳第一百五十三に傳有り、胡紘・何澹・林栗・高文虎・鄭丙・京鏜・謝深甫・許及之・梁汝嘉と合傳。○權邦彥は乃……權邦彥は『宋史』卷三百九十六、列傳第一百五十五に傳有り、史浩・王淮・趙雄・程松・陳謙・張巖と合傳。○汪若海張運……汪若海・張運・柳約は『宋史』卷四百四、列傳第一百六十三に傳有り、李舜臣・孫逢吉・章穎・商飛卿・劉穎・徐邦憲と合傳。○林勳劉才邵……林勳・劉才邵は『宋史』卷四百二十二、列傳第一百八十一に傳有

り、許忻・應孟明・曾三聘・徐僑・度正・程秘・牛大年・陳仲微・梁成大・李知孝と合傳。李庭芝は同卷四百二十一、列傳第一百八十に傳有り、楊棟・姚希得・包恢・常挺・陳宗禮・常琳・家鉉翁と合傳。○徐清叟徐榮……徐清叟は『宋史』卷四百二十、列傳第一百七十九に傳有り、王伯大・鄭案・應儼・李曾伯・王埜・蔡抗・張礪・馬天驥・朱熠・饒虎臣・戴慶炯・皮龍榮・沈炎と合傳。徐榮叟は同卷四百一十九、列傳第一百七十八に傳有り。宣縉・薛極・陳貴誼・曾從龍・鄭性之・李鳴復・鄒應龍・余天錫・許應龍・林略・別之傑・劉伯正・金淵・李性傳・陳韓と合傳。○宣縉鄒應龍……前注參照。○彭義斌山東……『宋史』卷四百三、列傳第一百六十二、賈涉傳・同卷四百一十七、列傳第一百七十六、趙范傳・同卷四百七十六、列傳第二百三十五、叛臣傳中、李全傳上。○又一百第六……『宋史』卷三百五十七、列傳第一百一十六、李熙靖傳・同卷四百五十三、列傳第二百一十二、忠義傳八、李熙靖傳。なお王維の句は「菩提寺禁、裴迪來相看說逆賊等凝碧池上作音樂、供奉人等舉聲便一時淚下、私成口號、誦示裴迪」詩のもの。○又南唐世家……韓熙載は『宋史』卷四百七十八、列傳第二百三十七、世家一、南唐李氏に傳有り。○南唐の徐鉉……徐鉉は『宋史』卷四百四十一、列傳第二百、文苑傳三に傳有り。楊業は同卷二百七十二、列傳第三十一に傳有り、荊罕儒・曹光實・張暉・司超等と合傳。○南唐の周惟……周惟簡は『宋史』卷四百七十八、列傳第二百三十七、世家一、南唐李氏に傳有り。歐陽廻は歐陽廻か。歐陽廻は同卷四百七十九、列傳第二百三十八、世家二、西蜀孟氏に傳有り。

【現代語譯】

『宋史』の巻帙には、やはり定め直すべきものがある。張憲・楊再興・牛皐は皆な岳飛の部將であり、どうして岳飛傳の後に附けないのだろうか。ましてや牛皐傳の末に岳飛の諸將を分遣して東西京の州郡を取り戻す事を述べているのはどうしたことか。牛皐が諸將を派遣しているわけでもないのに牛皐傳に述べているのだから、舊史はもともと牛皐傳を

岳飛傳の後に附けてあったのに、編次の時になって急に離して岳飛傳と牛臯傳を別けてしまったことがわかる。解元と成閔はいずれも韓世忠の部將であるが、またどうして韓世忠傳の後に附けないのだろうか。劉子羽と胡世將は、吳玠兄弟と蜀に在って同じ功績を立て軍功を共にしているのに、どうして吳玠・吳璘兄弟に次いで述べないのだろうか。郭浩と楊政もともに吳氏の部將であり、兵を用いることは終始吳氏とともにしているのに、どうして吳玠・吳璘の後に附けないのだろうか。王友直と李寶は、ともに北土より義舉して南歸した人であり、すでに一卷に並んでいる。李顯忠もまた鄜延より義舉し、數國に關わりながらも、命がけて南宋に身を投じ、功名はとりわけ著しい。魏勝は漣水で兵を起し、海州を據點にして南歸し、李寶と一緒の行動をした。どうして一卷に傳を連ねて、李顯忠を先頭とし、魏勝・李寶・王友直がこれに續かないのだろうか。秦檜が國に專制すること十九年、總じて政府に居る者は、すこしでも逆らったことで排斥されないことはなかった。ただ王次翁だけは始終秦檜が可愛がっていたので、王次翁傳は秦檜傳の後に附けるべきである。陳自強が韓侂胄に付き従ったことは、王次翁が秦檜に付き従ったことと同じことである。(そのため)陳自強も當然韓侂胄傳の後に附けるべきである。けれども皆列傳に組み入れられ、悪者の仲間であることを明かにしないのはどうしてであろうか。權邦彥は徽宗・欽宗の時代の人であり、高宗の紹興三年に亡くなった。けれども寧宗の諸臣の列にはさまっている。汪若海・張運・柳約もまた皆欽宗・高宗の時代の人である。けれども理宗の諸臣の列にはさまっている。林勳・劉才邵等は皆高宗・孝宗の時代の人である。けれども徳祐の末の李庭芝等諸臣の後にはさまっている。時代を顛倒しているとは言えまいか。徐清叟と徐榮叟は兄弟である。人柄も官位もほぼ同じである。どうして共に傳を連ねないで、それぞれ別の卷に置くのか。宣繪・鄒應龍・別之傑・金淵・張礪・饒虎臣・戴慶珂の諸傳は、ただ經歷を述べるだけである。絶えて一言一事も無い。これらを立傳するはどうしてだろうか。『五代史』は韓通のために傳を立てていないので、『宋史』は韓通の傳を立てて補った。これは誠に正しい。彭義斌は山東より義舉し、李全に随っ

て南歸した。そこで趙范や趙葵等と金兵を破り、彭義斌だけが攻撃して下灣渡まで行き、金人を淮で壓倒した。「以上のことは賈涉傳に見える。」後に李全が勝手に制置使の許國を殺したので、そこで彭義斌は李全の使者を斬り盛んに罵って「逆賊め、國の厚い恩を受けながら、好き勝手に制置使を殺すとは。私は必ずこの仇を討ってやる。」と言った。折しも李全は恩州を攻めていたので、彭義斌はすぐさま戦いに出で李全を敗った。李全は制使の徐晞稷に、彭義斌に手紙を送って連和したいと求めた。彭義斌は手紙を趙善湘に届けて「逆賊の李全を誅殺できなければ、國土も恢復できない。ただ兵を派遣して淮を抑えて、南路を斷つことができれば、必ず逆賊を滅ぼすことができる。賊を平定した後、私が河北で戦い、盱眙の諸將が河南で戦えば、神州は恢復されるだろう。」と言った。趙范もまた趙善湘に「彭義斌が李全に迫ることは、山が卵を押し潰すようなものだ。それなのに彭義斌が必ず願い出してから李全を討伐しようとしては、朝廷への尊崇を心得ているからであろう。」と言った。「以上のことは趙范傳に見える。」彭義斌は眞定を攻め、金の武將である武仙を降伏させ、その軍勢は數十萬に至り、土地を分け入って北上し、元兵と内黃の五馬山で戦い、兵は敗れたが彭義斌は降服せずに死んだ。「以上のことは李全傳に見える。」これほどの人物は傳を立てないわけにはいけない。それなのに『宋史』はとうとうこれを漏らしている。また一百六卷にもうすでに「李熙清は常州晉陵の人であり、靖康の變の際には、張邦昌の僞命を拒み、憤って食を絶ち、筆を求めて王維の『百官いつの日にか再び天子に參内せん』の句を書いて死んだ。」という記述がある。二百十二卷にもまた「李熙靖は晉陵の人であり、張邦昌が直學士院を遣わすと憤って食を斷ち、友人に向かつて『百官いつの日にか再び天子に參内せん』と言った。」とある。これは同一の人である。それなのにととうとう重複してしまっている。なんとここまで亂れていても正すことが無いのだろうか。また南唐世家にはすでに韓熙載傳が立傳されている。劉仁瞻・皇甫暉・姚鳳は皆南唐に臣節を守った者であるが、どういう譯でまた彼らのための傳を立てないで、韓熙載の後ろに附けているのか。南唐の徐鉉と北漢の楊業は、いずれも後に宋に仕

えたので、すでに宋臣の列傳に入っている。南唐の周性簡と西蜀の歐陽迥も亦た宋に仕えて長年にわたり官職を歴任したが、どうして宋臣の列傳に入れずに、南唐・西蜀の世家の後に附けるのか。これは皆自分でその凡例を亂しているのである。

(小澤さやか・栗栖亞矢子)